

田久松ヶ浦

—福岡県宗像市田久所在遺跡の発掘調査報告—

宗像市文化財調査報告書 第47集

1999

宗像市教育委員会

T A K U M A T U G A U R A

田久松ヶ浦

—福岡県宗像市田久所在遺跡の発掘調査報告—

宗像市文化財調査報告書 第47集



1999

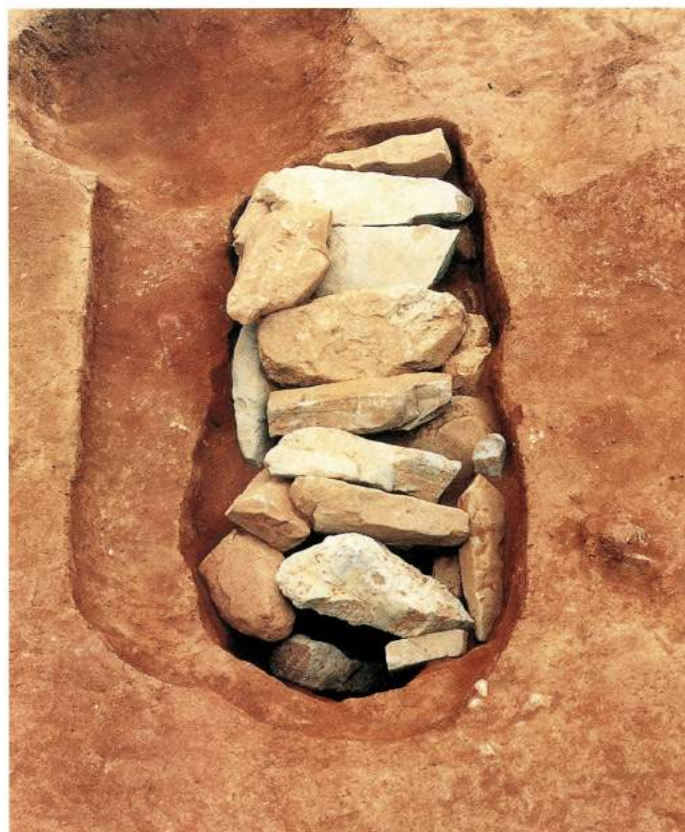
宗像市教育委員会



(1) 田久松ヶ浦遺跡周辺の航空写真（平成 11 年 9 月撮影）



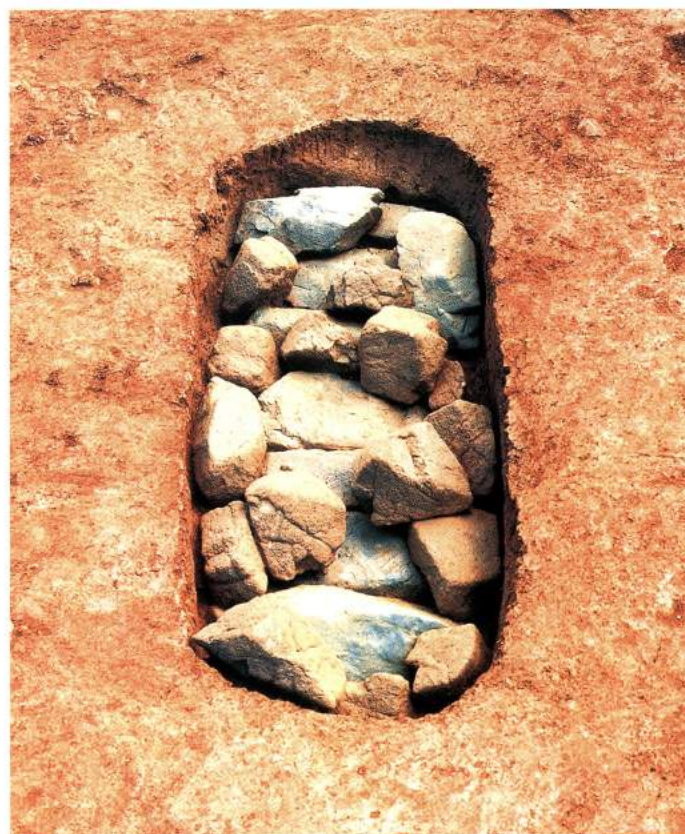
(2) SK206 出土有柄式磨製石剣



(1) SK206 石蓋検出状況（西から）



(2) SK206 遺物出土状況（西から）



(3) SK218 石蓋検出状況（西から）



(4) SK218 棺台および遺物出土状況（西から）

序 文

宗像市は福岡県北部の福岡市、北九州市のほぼ中間に位置し、周囲を山塊に囲まれた市域面積 76.82 平方kmの内陸盆地状の地理的景観を有しています。

昭和 36 年の国鉄鹿児島本線の電化は、福岡市、北九州市への通勤圏として注目され、昭和 38 年に着工の自由ヶ丘団地造成、41 年着工の日の里団地造成などがはじまり、人口の急増とともに急速な都市化が進められてきました。今日では、「快適生活都市・学術文化都市・高福祉都市」をめざして、さらなる発展を続けています。

しかしながら、各種の開発はわたしたちの暮らしに利便性をもたらす反面、自然・歴史・生活環境の大幅な変更を伴うものであり、地球的規模での生活スタイルの方向転換が迫られています。

近年では埋蔵文化財を生活環境の一部であるとの認識が少しずつ浸透しはじめ、本市においても開発に先だって、重要なものについては保存整備を図り、歴史遺産を後世に伝えようとする努力を地道に進めています。

本報告書は、平成 10 年度に実施した縄文時代から平安時代にかけて営まれた田久松ヶ浦遺跡の調査成果のうち、弥生時代前期の墳墓群の発掘調査記録をおさめております。

本書が、広く文化財保護行政及び学術研究に貢献することを願いますとともに、発掘調査全般にわたってご協力いただいた数多くの方々に、心からの感謝の意を表する次第です。

平成 11 年 3 月 31 日

宗像市教育委員会

教 育 長 原 田 慎 太 郎

例 言

1. 本書は、宅地造成に伴い平成 10 年度に緊急発掘調査を実施した田久松ヶ浦遺跡（宗像市大字田久字松ヶ浦 1172-1 ほか）の調査報告書である。
2. 発掘調査は、宗像市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 田久松ヶ浦遺跡は、福岡県文化財番号 330801 である。
4. 本報告書の遺物番号は、すべて通し番号である。
5. 遺構の名称は次のように記号化した。ST：甕棺墓 SK：土坑・木棺墓・土壙墓
SU：貯蔵穴 SC：竪穴住居跡 SD：溝
6. 測量は、国土調査法第Ⅱ座標系を用い、方位は G.N.（座標北）の標記があるもの以外は、すべて磁北である。
7. 本書に掲載した平板測量図及び遺構実測図の作成は、岡崇・安部裕久・秋成雅博・小樋千鶴子・江崎靖隆・細川愛が行なった。
8. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、主に秋成が行い、安部が補った。
9. 本書に掲載した遺構、遺物の製図は、中原美知子・多比良佳奈子が、遺物の整理は、西村広子・田代貞子・浅倉弥生・田崎紘子・東和子・濱田広美が行なった。
10. 本書に掲載した遺跡及び調査区の写真撮影は（有）空中写真企画、遺構の写真撮影は岡・秋成、遺物の写真撮影は白木英敏が行った。
11. 現地調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々から貴重なご指導とご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。（敬称略）
甲元真之（熊本大学）、橋口達也・池辺元明（福岡県教育委員会）、田崎博之（愛媛大学）、中山清隆（女子聖学院短期大学）、中村修身（北九州市埋蔵文化財調査室）、李東注（東亜大学校博物館）、李弘鐘（高麗大学校考古美術史学科）、小池史哲（福岡県教育委員会）、伊崎俊秋（福岡県教育委員会）、田中良之・金宰賢（九州大学）、亀田修一（岡山理科大学）、梅木謙一・田城武志・高尾和長（松山市埋蔵文化財センター）
12. 本書の執筆は原俊一（第 1・3 章）、白木・秋成（第 2 章・付）が行った。
13. 本書の編集は原が行った。
14. 本調査において出土した遺物および実測図、写真等の資料は、宗像市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 序 説	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 位置と環境	2
4. 調査の概要	4
第2章 調査の記録	9
1. 弥生時代墳墓の調査	9
第3章 まとめ	21
1. 弥生時代墳墓について	21
付 久原遺跡の弥生時代前期墳墓	43
1. はじめに	43
2. II区土壌墓・木棺墓の調査記録	43
3. まとめ	45

挿 図 目 次

第 1 図 田久松ヶ浦遺跡周辺の主要遺跡分布地図 (1/25,000)	3
第 2 図 田久松ヶ浦遺跡事業計画図 (1/1,000)	5・6
第 3 図 田久松ヶ浦遺跡遺構配置図 (1/300)	7・8
第 4 図 SK201・203・ST204・SK207・208 遺構実測図 (1/40・1/20・1/10)	14
第 5 図 SK206 遺構実測図 (1/40・1/10)	15
第 6 図 SK209～211・215～217・226・230 遺構実測図 (1/40・1/10)	16
第 7 図 SK218 遺構実測図 (1/40・1/10)	17
第 8 図 SK201・203 出土遺物実測図 (土器 1/3・石器 1/2)	18
第 9 図 ST204・SK206・208 出土遺物実測図 (土器 1/3・石器 1/2)	19
第 10 図 SK210・211・218・226 出土遺物実測図 (土器 1/3・石器 1/2)	20
第 11 図 田久松ヶ浦遺跡関連の遺跡分布地図	28
第 12 図 久原遺跡全体図 (1/4,000)	46

第13図	久原遺跡Ⅱ区弥生墳墓周辺の遺構配置図 (1/300)	47
第14図	久原遺跡Ⅱ区SK1～3・5～8遺構実測図 (1/40・1/10)	48
第15図	久原遺跡Ⅱ区SK1・5・8出土遺物実測図 (土器 1/3・石器 1/2)	49

表 目 次

表1	田久松ヶ浦遺跡木棺法量表	28
表2	田久松ヶ浦遺跡弥生墳墓一覧表	32
表3	田久松ヶ浦遺跡出土石剣・石鏃一覧表	33
表4	田久松ヶ浦遺跡竪穴住居一覧表	34
表5	田久松ヶ浦遺跡落穴状遺構一覧表	34
表6	田久松ヶ浦遺跡貯蔵穴一覧表	34
表7	北部九州における縄文晩期～弥生前期の遺物を伴う墳墓地名表	35
表8	久原遺跡弥生前期土壇墓・木棺墓一覧表	50
表9	久原遺跡弥生前期遺物一覧表	50

図 版 目 次

巻頭カラー図版1	(1) 田久松ヶ浦遺跡周辺の航空写真 平成11年9月撮影 (2) SK206出土有柄式磨製石剣
巻頭カラー図版2	(1) SK206石蓋検出状況(西から) (2) SK206遺物出土状況(西から) (3) SK218石蓋検出状況(西から) (4) SK218棺台および遺物出土及び 遺物出土状況(西から)
図版1	田久松ヶ浦遺跡周辺の航空写真 (1/12,500) 昭和53年6月撮影
図版2	(1) C区全景(東から) (2) B・C区全景(東から) (3) A区全景(北から)
図版3	(1)～(8) SK201・203・ST204・SK206
図版4	(1)～(8) SK206～210
図版5	(1)～(8) SK211・215～218
図版6	(1)～(7) SK218・226・230
図版7	(土器) SK201・203・ST204・SK206・208・211
図版8	(土器・石器) SK201・203・206・210・218・226

第1章 序 説

1. 調査に至る経過

鞍手郡との境に連なる山塊から北西にのびる丘陵は、宗像の内陸盆地状の地形を東西に二分する。遺跡は、この丘陵先端部の標高16～37mの稜線及び東斜面にあって、眼前の狭長谷地を釣川の支流が南から北へむかって流れる。遺跡及び周辺丘陵は、早くから自由ヶ丘団地などの開発によって宅地化が進み、遺跡等の詳細については、不明な部分が多かった。

平成10年4月17日に、本遺跡を含む宗像市大字田久（字松ヶ浦）1172-1番地外の丘陵地開発が、宗像市開発指導要綱に基づく事前協議会に図られた。現地踏査の結果、古墳などの痕跡は確認できなかったが、表面採集された須恵器から何らかの遺構の存在が考えられることから試掘調査を実施した。

この結果、丘陵稜線に土墳墓及び竪穴遺構、東側緩斜面に住居跡、東側裾部平坦面に貯蔵穴が存在することがわかり、遺跡の保存方法について協議を重ねたが、最終的には発掘調査を実施して記録保存の措置を図ることに決定し、調査工程及び予算の合意を得て平成10年6月25日に調査委託契約を結び、発掘調査に着手した。現地調査は平成10年7月17日に入り、同年11月6日に完了、引き続き整理作業に入った。調査期間中の10月24日には一般市民を対象にした現地説明会を実施して、350人を越える見学者が訪れた。

文化財保護法にかかる手続き

埋蔵文化財発掘の届出について（平成10年6月23日付10宗教社第232号進達）

埋蔵文化財発掘調査の報告について（平成10年7月23日付10宗教社第337号提出）

埋蔵物発見届（平成10年11月10日付10宗教社第603号提出）

埋蔵文化財保管証（平成10年11月10日付10宗教社第604号提出）

2. 調査の組織

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	原 田 慎 太 郎
		教 育 部 長	織 戸 勝 也
		社会教育課長	井 上 弘
		文化財係長	原 俊 一
		主 査	安 部 裕 久
庶 務	発 掘 調 査	技 師	岡 崇
		嘱 託	秋 成 雅 博

3. 位置と環境

宗像市は福岡県北部に位置し、福岡・北九州市のほぼ中間点にあたる。三方を低い山塊に囲まれた盆地状地形は市北西部で北西に開き、市域を東西に貫流する釣川はここから玄界灘にむかって北流する。市域は東西 13.2 km、南北 9.7 km、面積 76.82 平方kmである。

鞍手郡宮田町の靡山（296.9 m）から北西にのびる丘陵は、宗像市盆地状地形の中央に張り出し、北側直下は釣川がながれる。田久松ヶ浦遺跡は、この丘陵（田久丘陵）先端の東側に広がる小丘陵の稜線及び斜面に位置する。遺跡の東側前面には釣川の支流によって開かれた谷地沖積低地が、南北に細長く 2 km にわたって形成されている。

遺跡地の地質は上位丘陵が中生代の白亜紀前期末（約一億年前）の北崎トータル岩といわれる花崗岩地質を形成している。調査地の地質現況はトータル岩の風化が著しく進み、大部分が真砂（花崗岩質岩石が風化してできた砂）化している。

本遺跡の西方 1 km には曲香烟遺跡がある。弥生時代前期の貯蔵穴が主体である。東側 1 km に田久瓜ヶ坂遺跡がある。4 世紀の前方後円墳をはじめに石棺墓、土壙墓、円墳などの古墳時代遺構と鎌倉時代の積石墓が出土し、なかでも 1 号前方後円墳の第 3 主体部である円筒棺は、完全なものとしては九州初出土である。

釣川を挟む北東 1 km の丘陵に三郎丸今井城遺跡があり、弥生時代後期から近世にかけての集落遺跡である。祭祀土坑から皇朝十二銭が 120 余枚出土した。

北西 1 km の丘陵上に曲香烟遺跡と同様な性格の須恵クヒノ浦遺跡がある。この遺跡は前方後円墳の下層から弥生時代の貯蔵穴や竪穴住居跡が検出された。

南西 2 km の水田地帯は宗像の穀倉であり、周辺丘陵には重要な遺跡がある。朝町竹重遺跡は古墳時代後期の古墳下層から弥生時代前期～後期にかけての墳墓が出土した。弥生時代の 150 基を越す木棺墓、土壙墓が調査され、墳丘墓形成の過程を知る良好な遺跡である。銅戈、銅矛などが出土している。光岡長尾遺跡は古墳時代の円墳の下層から弥生時代前期の環溝と環溝に囲まれた内部に貯蔵穴を配置する遺跡である。

光岡辻ノ園遺跡は集落遺跡であり、溝からアマゾナイト製の勾玉が出土した。久原遺跡は弥生時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡であり、弥生時代前期には低位丘陵上に木棺・土壙墓・甕棺墓が営まれた。

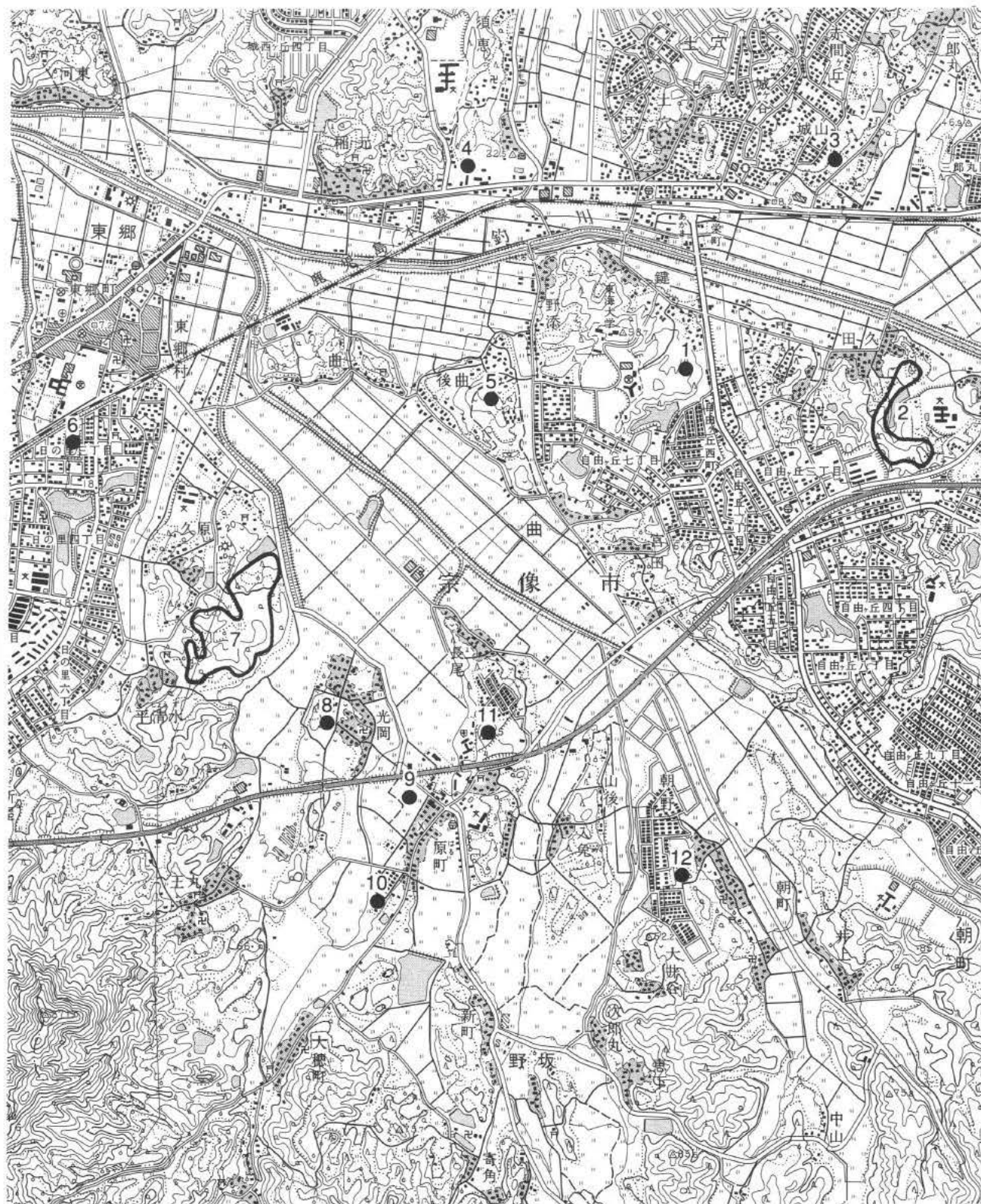
参考文献

宗像市史編纂委員会 1997『宗像市史』通史編第一巻 自然 考古

竹内理三ほか編 1988『角川日本地名大辞典』40 福岡県

伊東尾四郎 1944『宗像郡誌』上編

伊東尾四郎 1931『宗像郡誌』中編



第1図 田久松ヶ浦遺跡周辺の主要遺跡分布地図 (1/25,000)

- | | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 田久松ヶ浦遺跡 | 2. 田久瓜ヶ坂遺跡 | 3. 三郎丸今井城遺跡 | 4. 須恵クヒノ浦遺跡 |
| 5. 曲香畑遺跡 | 6. 東郷高塚遺跡 | 7. 久原遺跡 | 8. 光岡辻ノ園遺跡 |
| 9. 光岡六助遺跡 | 10. 光岡頭割遺跡 | 11. 光岡長尾遺跡 | 12. 朝町竹重遺跡 |

4. 調査の概要

調査区は、遺構の立地と分布にしたがって、A～C区に分けて実施した。

A区

丘陵東側裾部の平坦面に遺構の分布がある。調査面積は約750 m²。標高は16～19mで、現状は20数年前の開墾により、畑として利用されていた。そのため上部の削平は著しく、表土直下から遺構面が現れた。調査区南側緩斜面から弥生時代の円形プランの貯蔵穴が出土した。基底面は最大のもので2.16 m、最大の深さは0.9 mである。各遺構から弥生土器片が出土した。

B区

丘陵稜線から東側斜面に遺構の分布がある。調査面積は約1,000 m²、標高は25～31mで、検出遺構は落穴状遺構・竪穴住居跡・柱穴・溝である。落穴状遺構はC区の稜線からB区斜面にかけて一本のけもの道に沿うように分布が認められる。平面形は円形と方形があり、大きさは1 m前後で、坑底の小穴は多いもので10個を数える。坑内からの出土遺物はなく、年代の決め手を欠く。住居跡の分布は標高の上位と下位で2群にわかれる。平面形は方形プランを主体にし、一辺の壁面最大長は5.7 mを測るものがある。支柱穴は2本柱が主流で、4本柱のものが1棟ある。炉および土坑を屋内に配置する。すべての住居跡にベッドが付設される。

C区

遺構は南から北へ向かって緩やかに下降する丘陵稜線上および東側斜面に分布がある。調査面積約1,500 m²。標高は31～37 mで、検出遺構は落穴状遺構・円形及び方形竪穴住居跡・貯蔵穴・木棺墓・土壙墓・焼土坑である。

落穴はB区から連続する線上に分布があり、落穴をつなぐ配置の線は等高線に直行している。貯蔵穴は調査区東南角から小形円形プランのものが2基出土した。SC205は本遺跡中最大の住居で平瓦片を出土した大形土坑に切られている。SC212は丘陵稜線上で検出し、復元径7.1 m、支柱穴を5本持ち、中央に円形の土坑を掘り込んでいる。木棺墓・土壙墓は丘陵稜線上にはほぼ一列に並ぶように配置が認められ、主軸は稜線に直交するものが大半である。

今回の調査で出土した主な遺構と遺物は下記のとおりである。

出土遺構	縄文時代：落穴状遺構6基 弥生時代：住居跡11基、貯蔵穴7基、木棺墓11基、土壙墓3基、甕棺墓1基 平安時代：焼土坑3基
出土遺物	弥生時代：有柄式磨製石剣2点、有茎式磨製石鏃12点、扁平片刃石斧1点 石包丁、砥石、壺、甕、高杯 奈良～平安時代：須恵器、平瓦片



第2図 田久松ヶ浦遺跡事業計画図 (1/1,000)

第2章 調査の記録

1. 弥生時代墳墓の調査

土壙墓3、木棺墓11基、甕棺墓1基を検出した。木棺墓の中の2墓については特異な石組みをもつものがあり、それらについては本文中や第3章で詳しく触れている。計測値等については表を参照されたい。

1) SK201 (第4図・図版3)

平面長楕円形の細長い土壙墓である。遺物は墓壙の東側床面から有柄式磨製石剣1点、有茎式磨製石鏃3点が出土した。石剣は切先を西に、石鏃は3点まとまって東に切先を向けている。さらに、墓壙の東壁際では床から18cmほど浮いた状態で壺1点、南西壁際にも床から10cmほど浮いて壺が1点出土している。

出土遺物 (001～006)

壺 (001・002) 001は口縁部の大部分を欠損する。底部は丸底で、口縁部は短く外反し、肩部に2条の沈線を有する。調整は口縁端部内面から外面にかけて横方向のミガキ、内面はナデ仕上げだが板状工具による擦痕が認められ、肩部には指頭圧痕が残る。底部については風化が著しく調整不明。頸部及び肩部外面に、黒漆状の付着物が微かに残り、黒塗りの可能性がある。焼成は良好で黒褐色を呈し、口径9.7cm、器高14.2cm、胴部最大径16.2cmを測る。002は口縁部を欠損する。底部は円盤貼付け状である。内外面ともに風化が著しく調整不明である。色調は明黄褐色を呈し、現存高8.8cm、復元胴部最大径12.7cm、底部径5.5cmを測る。

有茎式磨製石鏃 (柳葉形) (003～005) 003は色調灰白色を呈する。鏃は先端部から茎部まで明瞭に通り、身の断面は菱形、茎の断面は扁六角形を呈し、関は身に対して水平である。004は色調灰白色を呈する。鏃は先端部から茎部まで明瞭に通り、身の断面は菱形、茎の断面は扁六角形を呈し、関は身に対して直角である。005は色調褐色を呈する。鏃は先端部から茎部まで明瞭に通り、身の断面は菱形、茎の断面は多角形、関は身に対して水平である。

有柄式磨製石剣 (006) 色調は淡い黄緑色を呈する。風化が著しく原形を留めていないため調整や形態的特徴については不明瞭である。しかし、無段柄式であること及び鏑部に段を有することは確認している。

2) SK203 (第4図・図版3)

平面隅丸長方形の木棺墓である。僅かだが南及び東側壁際に粘土塊が残っており、小口板と側板の裏込めであろう。出土遺物は、墓壙の東壁際から切先を北に向けた状態の有茎式磨製石鏃2点、南小口部では壺が1点出土している。いずれも床面から13～15cmほど浮いた状態で

出土している。

出土遺物 (007～009)

壺 (007) 口縁部は短く外反し、肩部には沈線状の甘い段が付き、底部は平底である。口縁部の内外は横ナデ、外頸部は縦方向のミガキ、胴部上半は横方向のミガキ、下半部は横ナデを施している。肩部内面には指頭圧痕が残る。胴部内面の中位はナデ、下半には板状工具によるナデを施している。焼成は良好で橙色を呈し、口径 11.8cm、器高 19.8cm、胴部最大径 20.5cm、底部径 7.7cm を測る。

有茎式磨製石鏃 (柳葉形) (008・009) 008 は色調白灰色を呈する。鏃は先端部から茎部まで明瞭に通じ、身の断面は菱形、茎の断面は扁六角形、関は身に対して水平である。009 は色調暗青灰色を呈する。鏃は片面では比較的明瞭だが、もう一面においては不明瞭である。身の断面は逆扇形、茎の断面は多角形、関は身に対して右側は水平であるが、左側は大きく上向きになっている。

3) ST204 (第4図・図版3)

小児用甕棺墓である。上半部は大きく削平されており、下甕の底部付近のみ残存している。埋葬角は 52° を測る。

下甕 (010) 胴部下位から底部のみを遺存する。底部は完全な平底で、胴部は内湾しながら緩やかに立ち上がる。風化が著しく内外面の調整は不明である。色調は淡黄褐色を呈し、残存高 18.3cm、底部径 12.3cm を測る。

4) SK206 (第5図・巻頭カラー図版1・2・図版3・4)

特異な石組み構造をもつ墳墓で、内部には木棺を納めていたと考えられる。構造は2段掘り込みで、墓壇の南側に寄せて平面隅丸長方形の埋葬壇が掘り込まれている。

石蓋は9個の石材を掛け渡し、大きな隙間には塊石を置いているが、石材間の細かな隙間は礫や粘土などで塞いだ痕跡は認められず、そのため覆土が流入し、石蓋除去後の槨内は完全に埋まっていた。

石蓋下の石組みについて見てみると、両小口部は扁平な石材を2個立ち並べ、側面は2段に組まれているが、北壁側の最下段には石材の存在しない部分がある。最下段の石材で現位置を保っているものはすべて床面から 10～15cm ほど浮いており、床面から構築していないのが特徴である。側壁の地山削り出しによる細長いテラスに一部が載っているが、非常に不安定な構造である。なお、破線で復元した北側壁の石材は実測できずに崩落したが、このように最下段の石材がないため埋葬主体の木棺が腐蝕した後、内部にずれ込んだものがある。

出土遺物には有柄式磨製石剣1点、有茎式磨製石鏃1点、壺1点がある。石剣は埋葬壇北側の床面から 6cm ほど浮き、切先を西に向けた状態で出土している。石鏃は切先を東に向け、床面から 16～20cm ほど浮いており、南側最下段の石材下に挟まるような状態で出土している。

壺は東小口部の2石が平面ハ字状に開く隙間に置かれている。

出土遺物 (011～013)

壺 (011) 011は口縁部から胴部にかけて大きく欠損する。口縁部は短く外反し、頸部と肩部の境に段はつくらない。胴部上半が張り、底部はやや上げ底である。胴部下半に黒斑が見られる。口縁部は横ナデ、外面は横方向のミガキ、底部には不明瞭であるが木葉圧痕ともみられる痕跡がある。内面はナデ仕上げであるが、頸部内面は板状工具による擦痕、肩部には指圧痕が認められる。胴部には板状工具によるケズリ状の擦痕が残る。焼成は良好で橙色を呈し、復元口径8.2cm、器高13.7cm、復元胴部最大径15.2cm、底部径7.3cmを測る。

有茎式磨製石鏃 (柳葉形) (012) 色調黄褐色を呈する。風化が著しく表面が剥離しているため、鏃は茎部の一部に残存するのみで、身や茎部の断面形は不明である。関は身に対してやや上向きである。

有柄式磨製石剣 (013) 色調は黄褐色を呈する。剣身は長く鏃は先端部から鏑部付近まで通っているが、表面の風化が著しいため不明瞭である。剣身の断面形は凸レンズ状を呈しているが、本来は菱形であったと考えられる。鏑部には段が認められ、左右に張り出している。柄部は無段柄式で上端から把頭にかけて一方向に開くラッパ形である。柄上部は剣身と同幅で、柄部中央には縦方向に鏃状の稜線は認められず断面は紡錘形を呈する。鏑部と柄部はそれぞれ独立して表現されている。なおこの磨製石剣には前殺と呼ばれる切先部の屈曲が残存している。

5) SK207 (第4図・図版4)

平面隅丸長方形の木棺墓であろう。東小口部には半円形のテラスをつくり出している。出土遺物はない。

6) SK208 (第4図・図版4)

平面隅丸長方形の木棺墓である。西小口部には半円形のテラスがつくられ、塊石が3段に積み上げられている。東小口部には不整形のテラスがつくられ、その直上から角礫や板石で囲まれた状態で壺が出土した。西小口部では床面から30cmほどと、かなり浮いた状態で扁平片刃石斧が出土している。

出土遺物 (014・015)

壺 (014) 底部と胴部との接合部を欠損しているが、図面上で完形に復元している。口縁部は短く外反し、頸部はやや長く立ち上がる。肩部には沈線状の段が付き、底部は平底を呈する。底部内面から外面にかけて丁寧な横方向のミガキ、底部については風化が著しく調整不明である。肩部内面には指圧痕が認められる。焼成は良好で色調はにぶい赤褐色を呈し、口径11.2cm、復元器高18.9cm、胴部最大径20.1cm、底部径6.2cmを測る。

扁平片刃石斧 (015) 基部を欠損する。現存長5.5cm、幅4.8cm、厚さ1.8cmを測る。風化が進み全体的に丸みを帯びており、稜線は不明瞭である。

7) SK 209 (第6図・図版4)

東側を大きく攪乱されるが、平面長方形の木棺墓であろう。出土遺物はない。

8) SK210 (第6図・図版4)

平面長方形の木棺墓である。北西小口部に掘り込みを持つ。床横断面がやや船底状を呈する。遺物は墓壇東隅の床面直上に壺が1点、南西側の床面から有茎式磨製石鏃4点が、切先を南東小口部に向けた状態で出土した。

出土遺物 (016～020)

壺 (016) 底部は平底で、胴部は最大径を上位に持ち、頸部と肩部の境に段はつくらない。頸部はあまり締まらずにやや長く立ち上がり、口縁部は短く外反する。内面調整はナデ仕上げであるが頸部は板状工具による擦痕、胴部上半には削り状の痕跡が認められる。肩部には指圧痕が残る。風化が著しく外面及び胴部内面下半の調整は不明である。焼成は良好で明黄褐色を呈し、口径 16.4cm、器高 25.7cm、胴部最大径 26.4cm、底部径 7.8cm を測る。

有茎式磨製石鏃 (柳葉形) (017～020) 017 は色調淡灰色を呈する。鏃は身の部分においては明瞭だが、茎部では不明瞭となっている。身の断面は扁平感の強い菱形、茎部の断面は五角形から円形を呈する。関は右側は水平だが、左側はやや上向きになっている。身は中ほどで僅かに狭まり関部でやや開く。018 は色調暗青灰色を呈する。鏃は身の部分においては明瞭だが、茎部では不明瞭となっている。身の断面は菱形、茎部の断面は多角形、関は身に対してやや上向きである。身の両側は身膨状となっている。019 は色調青灰色を呈する。鏃は身の部分においては明瞭だが、茎部では不明瞭となっている。身の断面は菱形、茎部の断面は多角形から円形を呈する。関は身に対してやや上向きになっている。身の両側は身膨状となっている。020 は色調青灰色を呈する。鏃は先端部から茎部まで明瞭に通り、身の断面は身膨状の菱形、茎部の断面は扁六角形を呈し、関は身に対して上向きになっている。全体に研磨痕が著しく、身の両側は身膨状となっている。

9) SK211 (第6図・図版5)

平面長方形の木棺墓である。北西小口部には掘り込みがあり、その周辺からは裏込めと思われる小ぶりの板石や角礫が数個検出された。南東小口部には平面弾頭形のごく浅い窪みがある。遺物は床面から 50cm ほど浮いた状態で、上半を削平された壺が出土している。

出土遺物 (021)

壺 (021) 口縁部から胴部上半にかけてを削平のため失う。底部は平底である。調整は風化が著しく不明瞭だが外面にはヘラミガキが施されている。色調は橙色を呈し、残存器高 6.5cm、復元底部径 8.3cm を測る。

10) SK215 (第6図・図版5)

平面隅丸長方形の木棺墓であろう。SC 212 に切られ、残存状況は不良である。南東小口部

に接して角礫が2個検出されたが小口板を支える裏込めであろうか。出土遺物はない。

11) SK216 (第6図・図版5)

平面楕円形の小児用土壙墓である。出土遺物はない。

12) SK217 (第6図・図版5)

平面隅丸長方形の木棺墓であろう。出土遺物はない。

13) SK218 (第7図・巻頭カラー図版2・図版5・6)

SK206に類する木棺墓である。墓壙検出面より低い位置から石蓋を検出した。蓋石は8個の石材を掛け渡し、その隙間を大ぶりの石材で埋めているが、不完全であるため石蓋直下まで覆土が流入していた。木棺の腐蝕にともなって石槨全体が沈み込んだ状態とみられ、槨を構築する石材で現位置を保つものは少なく、大半は自立できずに内部に転落したりずれ込んだりしたものと考えられる。また墓壙の両側壁に細長いテラスや段を削り出している。SK206と大きく異なるのは墓壙床面の3ヶ所に棺台と思われる平石を配している点である。遺物は東小口部の床面上から壺1点、南側壁際床面より3～5cmほど浮いた状態で有茎式磨製石鏃2点が切先を東に向け出土した。

出土遺物 (022～024)

壺 (024) 底部は丸みの強い平底である。口縁部は短く外反し、頸部と肩部の境には沈線による段を有する。外面から口縁部内面にかけて横方向のミガキ、内面は口縁部下半からナデ調整を施す。肩部内面には指圧痕が残る。焼成は良好、色調は橙色を呈し、口径9.0cm、器高13.2cm、胴部最大径15.4cmを測る。

有茎式磨製石鏃 (柳葉形) (022・023) 022は色調灰色を呈する。鏃は先端部から茎部まで明瞭に通り、身の断面は菱形、茎の断面は扁六角形を呈し、関は身に対して水平である。023は色調灰白色を呈する。鏃は先端部から茎部まで明瞭に通り、身の断面は菱形、茎の断面は多角形を呈し、関はやや上向きである。

14) SK226 (第6図・図版6)

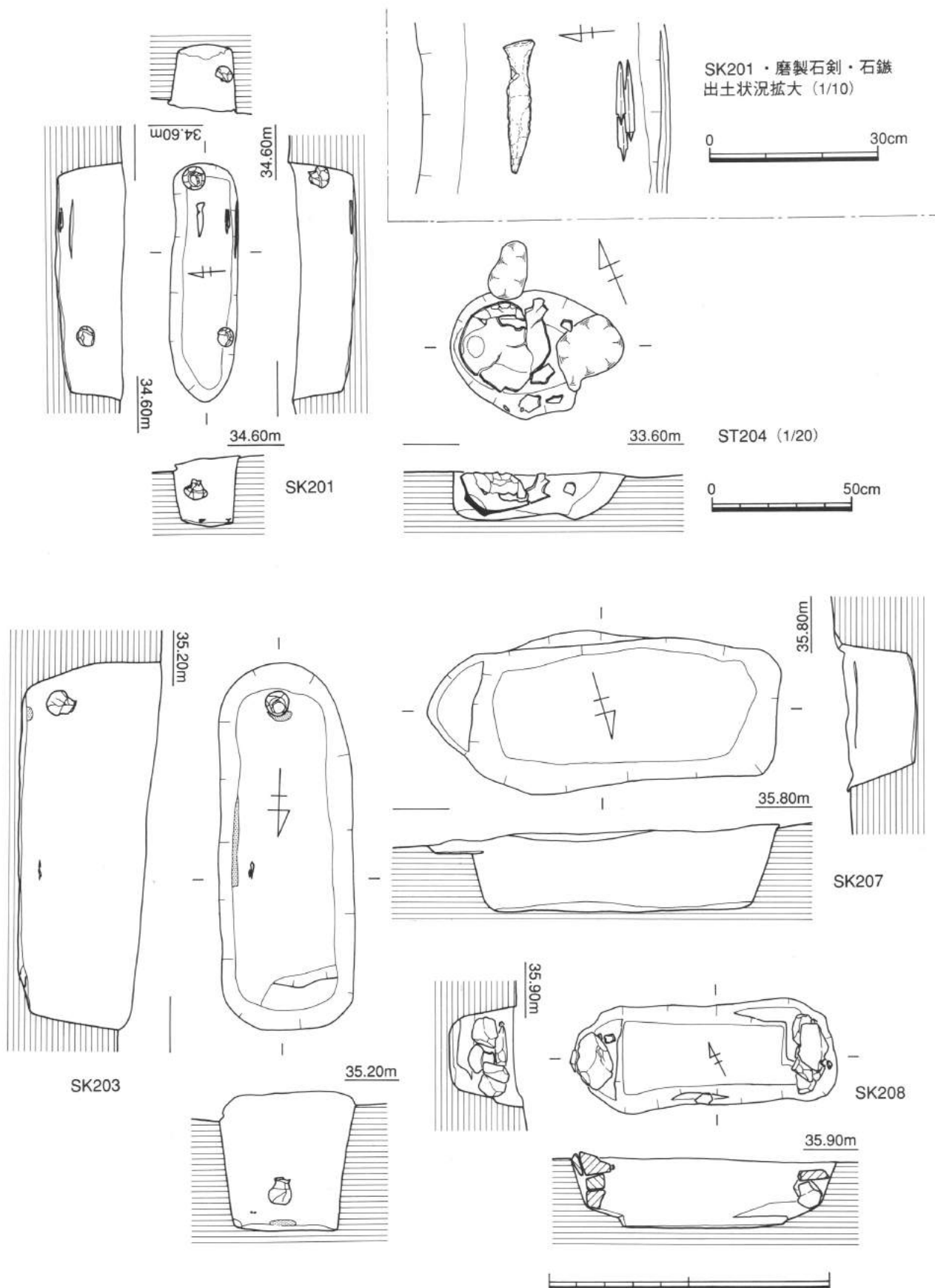
平面長楕円形の土壙墓である。SC107に墓壙のごく一部を切られている。遺物は壺が墓壙の南東隅から上半を削平された状態で出土している。

出土遺物 (025)

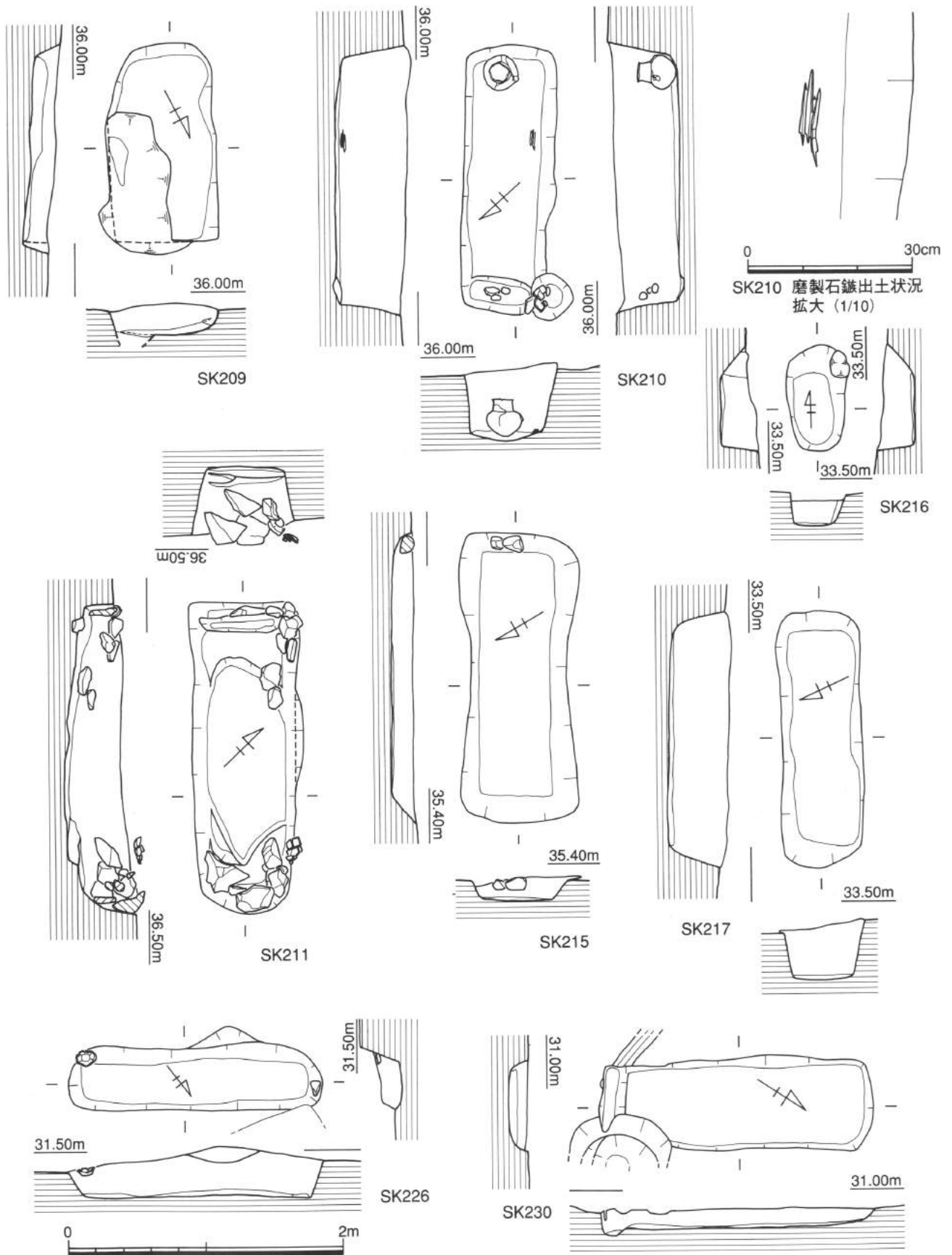
壺 (025) 底部は平底で、調整は外面に横方向のミガキが残るが、内面は風化が著しく不明である。焼成は良好、色調は赤褐色を呈し、現存高6.8cm、底部径7.1cmを測る。

15) SK230 (第6図・図版6)

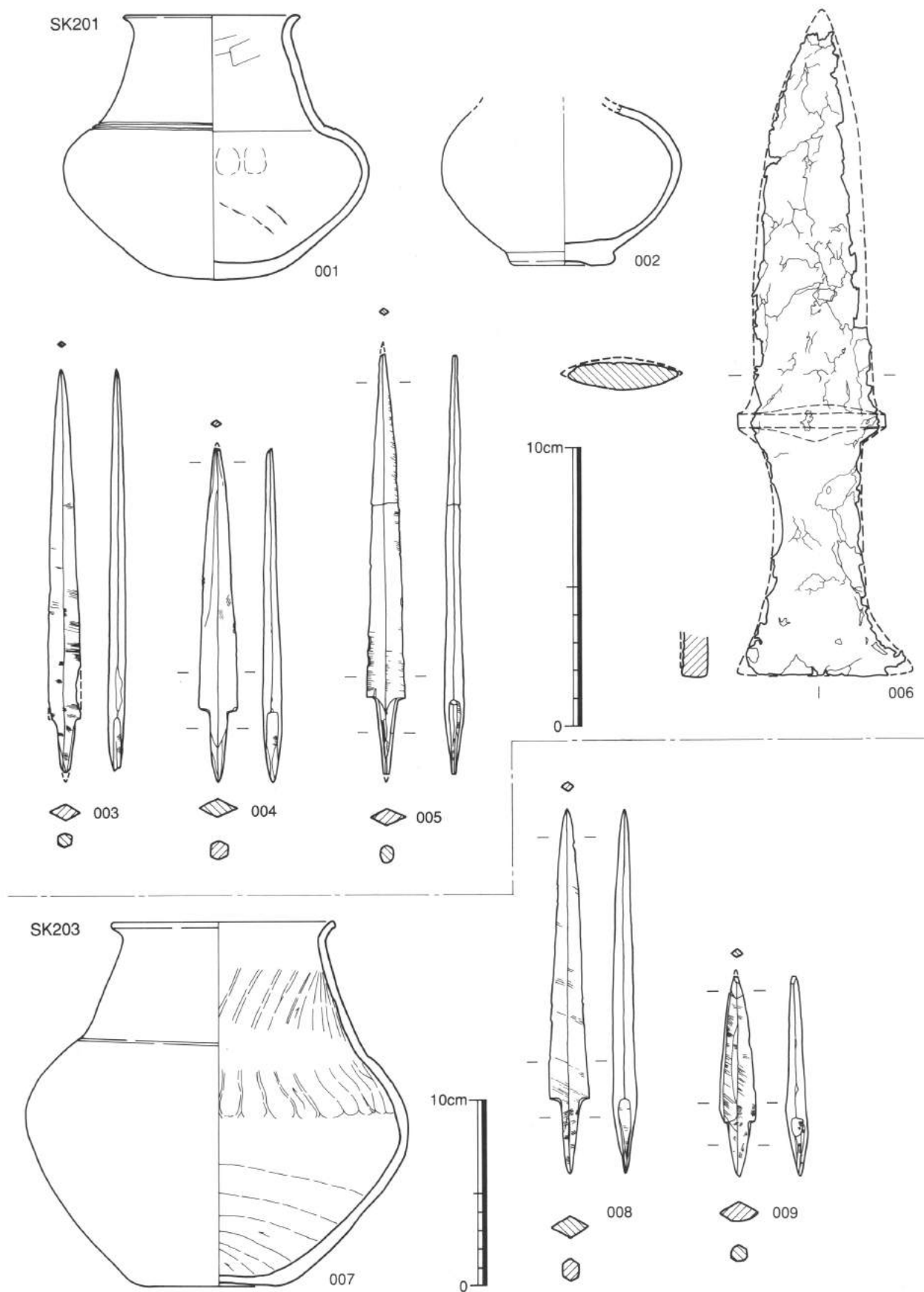
平面長方形の木棺墓である。SC107の床面から検出されており、残存状況は不良である。東小口部には掘り込みがある。出土遺物はない。



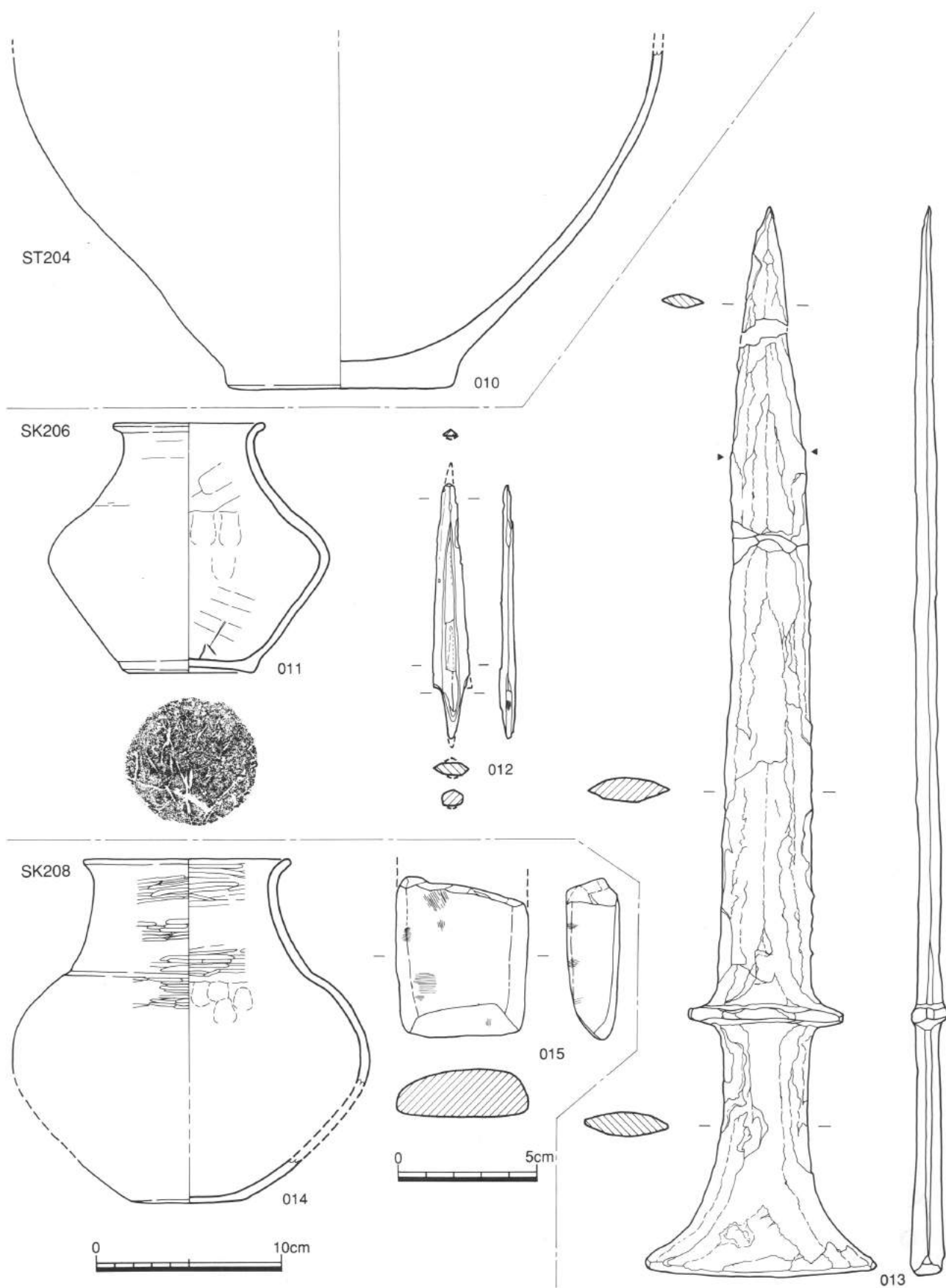
第4図 SK201・203・ST204・SK207・208 遺構実測図 (1/40・1/20・1/10)



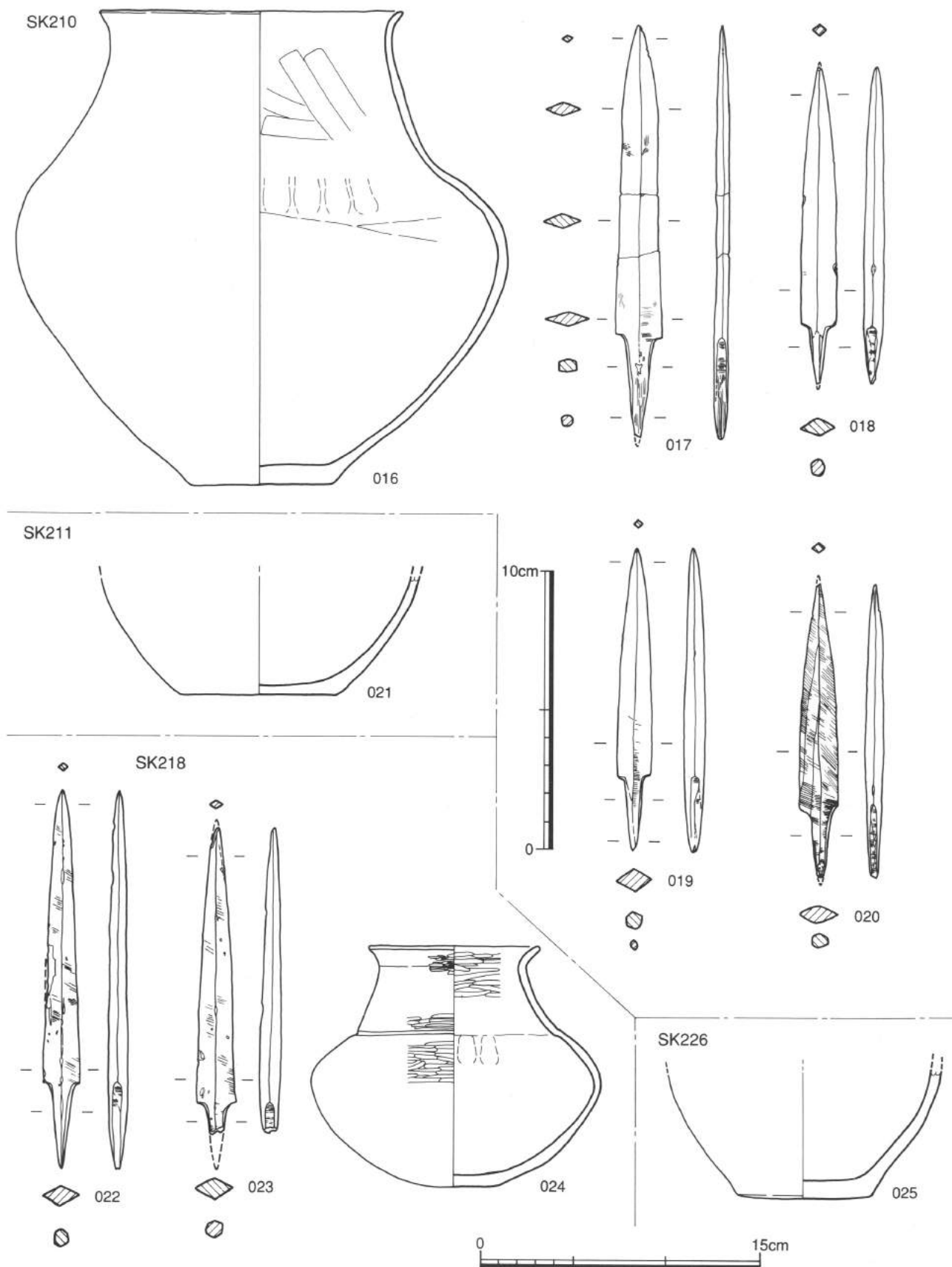
第6図 SK209～211・215～217・226・230 遺構実測図 (1/40・1/10)



第8図 SK201・203 出土遺物実測図 (土器 1/3・石器 1/2)



第9図 ST204・SK206・208 出土遺物実測図 (土器 1/3・石器 1/2)



第 10 図 SK210・211・218・226 出土遺物実測図 (土器 1/3・石器 1/2)

第3章 まとめ

1. 弥生時代墳墓について

試掘調査では丘陵稜線上のトレンチに数基の長方形墓壙を確認していた。本調査で表土を除去した段階では試掘時の遺構以外のものは検出できなかった。特にSK206・218周辺では墓壙検出がなかなかできずに、墓壙内石蓋の上面が現れたことによって遺構の存在を明確にできた。結果として、地山の土を見誤っており、地山としていた土は墓壙上を覆っていた墳丘の盛土であったろう。遺構検出時に土層ベルトを残しながら調査を進めていれば墓壙範囲からやや広めの長楕円形の低墳丘を確認する事も可能ではなかったかと思われ悔やまれる。また、先に調査したSK206の最上部の石を墓壙内に検出した時、宗像地域の5世紀代にみられる初期横穴式石室と判断したため、以後の発掘に慎重さを欠いてしまった。

今回の調査では、弥生時代の墳墓として木棺墓11基^{註1}、土壙墓3基、甕棺墓1基を検出したが、土壙墓2基（SK201・226）については木棺墓に近い構造の可能性を否定できないでいる。

1) 墳墓の立地と分布

南から北側の釣川に向かって緩やかに傾斜しながらのびる標高31～36mの丘陵稜線および東側緩斜面に15基の弥生時代墳墓が分布する。その範囲は南北約55m、東西約13mである。丘陵稜線上ではSK211とSK218の約36m間に、13基が切合うことなくほぼ一列に並び、主軸は稜線方向に直交させ、東西に置いている。この列埋葬のうち、SK206の東側には主軸を南北にするSK203が、SK208の西側には主軸を南北にするSK209が、反対の東側には主軸を東西にするSK215が列に添うように配されている。また、SK226・230の2基は列埋葬の一群とは直線で約12m離れた東緩斜面に築かれている。SK216はSK217の南に近接して築かれた小児墓であり、何らかの血縁関係を示すものであろうか。

2) 墳墓の構造について

調査で検出した15基の弥生時代前期墳墓のうち、墓壙内に石を持ち込むものは、この時期の北部九州で代表的な墳墓である支石墓や石棺墓と細部において共通するところもあり、両者の墳墓とはまったく異なる構造を持つものとする事はできない。田久松ヶ浦遺跡の石材を使った墳墓は、結果として木棺材をまったく残していないながらも、墓壙内石材の配置から木棺の存在を証することができる。以下に15基の墳墓構造を石材の有無、配置等を基準に分類する。

A類は墓壙内に据えた木棺を塊石で覆い、墓壙を掘った土で盛り土して低墳丘を築いたものである。SK206・218がこれに相当する。築造工程は隅丸長方形の墓壙を二段掘りし、墓壙底中央に直に木棺を据えた（SK218は棺台の石を3ヵ所に配置している）後、石材を木棺を覆うよ

うにして2～3段に横積みする。木棺を先に据えたと考えたのは、石材を入れるスペースを調整したものと推定できる長側壁側の細長いテラスや段の存在からである。この積み石上に8～9個のやや大ぶりの塊石を主軸に直交させて石蓋とし、石蓋間の隙間を小塊石で塞ぐ。ただし石蓋間の隙間には粘土等の目張りはなく、隙間を塞ぐ意図はみえない。調査時に蓋石を除いた時、蓋石下面まで土で埋まっていたのはこのためであり、この時期の石棺墓および古墳時代の石棺、石槨との違いがみられる。

B類は墓壇内に木棺を据え、両小口の棺外に塊石を積み上げて棺の固定を図るもので、SK208・210・211・215が相当する。SK210・211には小口板を設置する掘り込みがある。SK208では西小口のテラス面から3段、東小口ではテラス面から2段に積み上げるが、木棺の小口推定面と石材の間になお10cmほどの空間が存在する。SK211では西小口掘り込みの外側に板石を立てている。東西の小口側に塊石を2段、「コ」字形に配置して小口板、長側板の固定を図っている。

C類は素掘りの隅丸長方形墓壇内に木棺を据えるもので、SK203・207・209・217・230がこれに相当する。SK230には南側小口に掘り込みがある。

D類は素掘りの墓壇に直接埋葬をするもので、SK201・216・226がこれに相当する。

E類は甕棺墓でST204がこれに相当する。

A類は石棺墓、あるいは支石墓と共通する要素が認められるが、細部の観察から、この時期の韓国に分布がある石槨墓に類似する構造とすることができ、墓壇内に木棺＋石槨状の積み石＋石蓋を備えた構造の木棺墓を『松ヶ浦タイプ』の石槨墓として呼称しておきたい。従来、弥生時代前期の遺跡から検出されていた「石棺墓」「配石墓」「石囲い墓」などと呼称されている遺構についても、上部構造が削平によって失われている例について、今後、再検討を加えてみる必要がある。さらにこの種構造の墳墓上に大石があった場合は支石墓とすることもできることから、墓壇内に石材を有する墳墓の調査は、より慎重な観察が要求される。

墓壇内に配石あるいは裏込め石として使用する弥生時代前期の遺構は類例が少ない。徳島市庄・蔵本遺跡^{註2}の石棺墓1は、小口壁に板石を立て、北側長側壁に板石を用いるものの、南側長側壁は塊石を横積みしており、蓋石の配置には棺内空間を密閉する石材の形態と配置が見られない。さらに、中央部が棺内に沈み込んでおり、棺内にみられる石材は側壁から落ち込んだものと見ることもできる。通有の箱式石棺とは異なるため、これを石棺墓とするよりも、内部に木棺を有する石槨墓とすることで、上記の出土状況が得られるものと理解することができる。

島根県鹿島町堀部第一遺跡^{註3}では墓壇内に石蓋を有する墳墓が検出された。4号墓は200×80cmの墓壇内に長さ140cm、幅50cmの組み合わせ式木棺を置き、上部に塊石7個を配したものである。5号墓では200×80cmの墓壇の範囲に200個余りの石材が使われているという。調査区内から遠賀川式土器や土笛が出土している点で、北部九州から下関周辺の関門地域との交流によって、上記の遺構形態や遺物が持ち込まれたものであろう。本遺跡例とも構造的に類似する。愛媛県松山市西野Ⅲ遺跡^{註4}では敷石式木棺土壇墓および石詰式木棺土壇墓がこれに相当

し、第12・28号土墳墓は墓墳内の四壁に石材を配し、上部には木蓋がかかるものと思われる。第12号土墳墓は床面に敷石を全面に敷いている。

韓国の石槨墓には新村里Ⅵ区1号石槨墓、杜邱洞石槨墓、大田槐亭洞、礼山東西里、牙山南城里石槨墓などがあるが、ここでは報告書で知ることのできた2遺跡について述べる。

大谷里遺跡^{註5}の石槨墓は、田久松ヶ浦遺跡SK206の一方に寄って掘られた二段目の墓墳、棺を設置した後の石積みや蓋石の架構などに共通性が見られ、既報告資料の中では最も興味深い例である。

杜邱洞イムソク遺跡^{註6}の石槨墓は墓墳内の石積みが整然と積み上げていないため、南側長側壁の石は中央側になだれ込み、原位置に石のないところがある。石槨の蓋石は中央部のものが石槨内部に陥没しており、内部の木棺が腐朽したために、棺を覆っていた側壁の石材が崩れ、蓋石が沈み込んだものと考えられ、田久松ヶ浦遺跡SK206・218の検出状況に類似する。

B類は墓墳内の石材が壁面の一部に限定されるもので、木棺の小口部を補強する意図が読み取れる。とくにSK211にみる木棺の小口板から長側板にかけて石材を「コ」字形に配する例は庄・蔵本遺跡配石墓6・7、愛媛県松山市持田3丁目遺跡^{註7}のB・C類にもみられるものである。また、愛媛県松山市東山古墳群^{註8}6次調査地1区のSK1・2墓墳壁の石材配置が短側壁から長側壁にかけてL字形に配されているものもこの種の類似遺構とすることができる。

前原市宮ノ前遺跡^{註9}は配石を有する木棺墓であるが、床面の敷石（棺台）と木棺の頭部位の朱が顕著である。糸島郡志摩町新町遺跡^{註10}は支石墓を主体にした墳墓群であるが、墓墳内に配石を有する木棺墓も出土しており、棺台、小口石、木蓋押さえ石などの機能を持つものと思われる。

3) 出土遺物について

15基の墳墓から小壺9点、有柄式磨製石剣2点、有茎式柳葉形磨製石鏃12点、扁平片刃石斧1点及び甕棺墓使用の壺1点が出土した。人骨の遺存は皆無であるため、被葬者の性別・頭位・年令等に言及することができない。ここでは土器、石器の順に出土状況などについて述べる。

土器の出土状況 本調査では甕棺墓の土器を含め、10点の壺が出土したが、甕棺墓を除く9点の副葬壺はすべて棺外に配置が考えられる。長軸が丘陵稜線に直交するSK201・206・208・210・211・218・226は東小口側に配置がある。SK203は長軸が丘陵稜線に並行するが、壺は丘陵の高位である南小口側に配置される。SK201は東側配置とは別に反対の西側にも置かれる。SK210・211は小口の掘り込み側とは反対側に壺の配置がある。このため、壺の位置を頭位に置くものと仮定すると東ないし南に限定される。SK210・218は墓墳底に直に置かれていることから、木棺の設置前か直後に置かれたものであろう。SK203・206・226は木棺設置後に裏込めの土を入れた上に据えられたものと考えられよう。なお、SK201東側壺については木蓋上に据え置かれたものであろうが、壺と石剣の間に木板状の仕切りを想定することも可能である。SK201-001・SK211-021は木棺上・木蓋上に据え置かれたものであろう。SK201-002の資

料は木蓋が腐蝕した際に壙内に落ち込んできたものと思われるが、40cmほどの落下差をどのように落ち込んで正立状態で出土したのか、解釈に苦しむ。SK208は木棺設置後に小口と墓壙壁との間に板状の石囲いの空間を築き、空間内に壺（SK208-014）を入れている。この壺は棺が腐朽した際に内側に傾いたものと思われる。

副葬土器 全形を知りうる土器はSK201-001・SK203-007・SK206-011・SK208-014・SK210-016・SK218-024の6点、口縁部などを欠損するものはSK201-002・ST204-010・SK211-021・SK226-025の4点である。底部は縁の丸い平底（001・007・014・024）、上げ底状の平底（011）、上げ底状の円盤貼付底部（002）、平底（010・016・021・025）の4種がみられ、010・016・025の3点は厚手の平底となる。体部はやや扁球形で、最大径は中位より上にあって肩部の張りが強い001・002・024と張りの弱い007・011・014・016に分かれる。肩部には明瞭な沈線を有する001・024と不明瞭となる007・014・016に分かれる。011は体部と頸部の境そのものが不明瞭となる。頸部は内傾してやや湾曲しながら短く立ち上がるが、024は内傾度が強く、立ち上がりも短い。007・014・016になると立ち上がりの内傾度は小さくなり、立ち上がりは高くなる。口縁部は短く折れて外に開くが、001・007・024が強く意識されている。器面調整は内面を横ないし縦方向にナデ調整し、014・024では口頸部内外面に横方向のミガキを行っている。出土土器中には、この時期にみられる文様を有するものが1点も認められない。

以上の特徴から出土土器を3類に分けた。A類は001・024のグループに共伴関係から002と011が含まれる。B類は007・014のグループに021の土器が加わる。C類の016は厚手の平底を有し、器形が大形化する。これに同様の特徴を示す025と010が包含されよう。このことから、小形で器形にメリハリがみられる一群を最も古く位置づけ、大形化して厚手の平底を持つ一群を新しく位置づけてA→B→Cへとみることができる。A類は短く立ち上がる頸部に小さく外に折れる口縁、丸底状の底部に夜臼式土器の特徴が見られるが、肩部の沈線、扁球形の体部は板付式のものであり、SK201で共伴する小壺002は円盤貼付の底部を有する。これらの特徴は糸島郡二丈町曲り田遺跡^{註11}の曲り田新式より後出し、志摩町新町遺跡の夜臼式と板付I式の両要素を細部にみることができ、板付I式とする方が妥当と考える。C類に、より新しい要素をみとめながらも、板付I式の範疇で含めておきたい。

磨製石剣 磨製石剣はすべて有柄式磨製石剣と呼ばれるもので、SK201-006・SK206-016の2点である。2基は隣接する墳墓であるが、構造には差がみられる。2点の磨製石剣はいずれも切先を西に向け、墓壙底からわずかに浮いて出土した。いずれも木棺内に置かれたものであろう。磨製石剣が出土した2基の頭位を東に設定すれば、SK206-016は被葬者の右胸の位置になり、SK201-006では被葬者の頭部から頸部に接する位置になる。SK206-016は長さ38.4cmの完形品で刃部に前殺が明瞭にみられ、実用性に富むもので、使用頻度は少なかったとみることができる。SK201-006はSK206-016と同型式のものだが、使用による研ぎ減りが顕著である。2例とも有柄式のなかでは無段のもので、有段式の間中市垣生出土例と比べると柄の段を無視すれば全体の造りは近いものがある。柄の上端から把頭に向かって2/3ほどが平行に走り、直線的とな

る。その下半で大きく広がる。剣の身と柄の幅は同じである。柄の中央には鑄を有しない。柄の断面は紡錘形で、握りに適している形態は下條分類^{註12}のⅠ式の中でもa・b様式を共有し、段の有無を除くとより古式の様相をみせ、ⅠaとⅠbの折衷形式といえる。有段式は縄文晩期後半～板付Ⅰ式に、無段式を縄文晩期～前期に置いている点を重ねると、出土石剣を有段式と無段式の境となる板付Ⅰ式期に置くことに矛盾はない。

磨製石鏃 磨製石鏃は有茎式柳葉形磨製石鏃と呼ばれる形式で、SK201(003～005)・SK203(008・009)・SK206(012)・SK210(017～020)・SK218(022・023)の5基から12点が出土した。いずれも副葬壺を伴う。また、SK201・206は磨製石剣も伴っている。SK201・203・210・218は複数出土である。SK201は墓壇底南側壁際の床面出土で、3点をまとめて置き、切先は石剣とは逆方向に向いている。SK203は墓壇基底面から10cm以上浮いており、木棺上に置かれていたものであろうか。SK206は南側壁の基底石の下面縁に接して出土したもので、木棺上あるいは木棺設置後に棺を土で固定した後に置かれたものであろう。切先は石剣とは逆方向に向いている。SK210はほぼ墓壇基底面から出土したが、木棺の内外位置については明確にできない。石鏃の出土状況は一部に不明確なものもあるが、全体として、墓壇内の木棺外に配置される傾向がみてとれる。12点は全長7.2～15cm、茎長1.10～3.60cm、身の厚さ0.5～0.9cm、重さ5.0～10.5gである。身の中央には鑄がとおり茎まで及ぶ。茎の断面は扁六角形となる。いずれも下條分類のAⅠaに属すが、刃部は関部から切先まで直線的となる。関は身に対し水平に近く鋭いSK201、SK203の008、SK206、SK218のグループと、刃部は身膨状となり身厚はやや薄めで、関は身に対して上向きとなり、鋭さがやや薄れているSK203の009、SK210のグループに分かれる。後者は本遺跡資料のなかではやや後出するものと思われる。以上から、この種石鏃は下條分類では縄文晩期後半～板付Ⅰ式にかけて盛行するものとされており、板付Ⅰ式期の土器を共伴することとも矛盾しない。

扁平片刃石斧 扁平片刃石斧015がSK208から出土している。西側小口部の墓壇短側壁に積み上げた塊石の最上段の石の下面の位置に置かれたもので、本墳墓の副葬品とすることができよう。平面形は側面、刃部ともやや膨らみがあり、直線的ではない。断面もかまぼこ状で直線ではなく、早期の唐津市菜畑遺跡や前期の津屋崎町今川遺跡例に比べると後出するものであるが、全体としては平面形に比べ厚みを持っており、時期的に大きく下るものではないと考える。資料的には後の混入ではないとの判断から板付Ⅰ式平行期に置いておきたい。

遺物の共伴関係 北部九州の弥生時代前期の遺物を伴う墳墓遺跡について表7に示した。

この表から、磨製石剣および磨製石鏃を中心とした共伴関係をみると、新町遺跡24号墓で有茎式柳葉形磨製石鏃と壺、三国の鼻遺跡6号木棺墓で有茎式柳葉形磨製石鏃と打製石鏃、中・寺尾遺跡2号甕棺墓で有茎式柳葉形磨製石鏃と壺という組合せが認められるなど、遺物の共伴例は非常に少ない。有柄式磨製石剣にいたっては単独での出土例のみである。宗像市久原遺跡Ⅱ区SK8で有柄式磨製石剣と有茎式柳葉形磨製石鏃、田久松ヶ浦遺跡SK201で有柄式磨製石剣と有茎式柳葉形磨製石鏃および壺、SK206で有柄式磨製石剣と有茎式柳葉形磨製石鏃および壺、

SK203 で有茎式柳葉形磨製石鏃と壺、SK208 で扁平磨製石斧と壺、218 号墓で有茎式柳葉形磨製石鏃と壺が出土するといったように、2 種以上の共伴が見られることは特徴的である。

4) 被葬者と埋葬の単位について

甕棺墓を除く、14 基の墳墓について推定される埋葬施設の規模を表にした。木棺については外法で推定計測し、墓壙の短側壁に張り付くように石材配置があるものは、ここを木棺外法として取り扱った。

出土遺物を木棺の内外、墓壙内外での配置、数量の多寡を基準に木棺内に置かれるものを最上位とし、墓壙外に添えられるものを最下位として、被葬者との距離で推し量ると磨製石剣、磨製石鏃、扁平片刃石斧、小壺の順となり、このことを各遺構に反映させると、15 基の墳墓は次の 5 群に分けることができる。第一群は最も南側のグループで、4 点の磨製石鏃と小壺を副葬する SK210 とその南側に平行に配置がある SK211 の 2 基が相当する。第二群は木棺外に小壺を置き、扁平片刃石斧を副葬する SK208 を中心にこれを取り囲むように副葬遺物を持たない SK207・209・215 が含まれる。第三群は磨製石剣・磨製石鏃・小壺を副葬する SK206 とその北に磨製石剣・磨製石鏃・小壺を副葬する SK201、東に磨製石鏃・小壺を副葬する SK203 がこのグループに含まれる。第四群は磨製石鏃・小壺を副葬する SK218 とその南に副葬遺物を持たない SK216・217 と甕棺墓 ST204 がこのグループとなる。第五群は小壺を副葬する SK226 に SK230 が含まれる。以上から、第三群を最有力群とし、以下第四群→第一群→第二群→第五群への優劣が可能となる。このことから、石槨構造を有する SK218 に磨製石剣がなく、第三群の土壙墓である SK201 に磨製石剣が副葬されることは理解できよう。

本遺跡に展開した 15 基の墳墓は、出土土器を板付Ⅰ式の範疇に置いていることから、五群 15 基の被葬者はほぼ一世代間の中で築かれたものと考えたい。

5) 墳墓を介した地域間交流

弥生時代前期前半に宗像の地に石槨墓が出現し、板付Ⅰ式の新段階には宗像市久原遺跡^{註13}に棺台を有する墳墓を築く。板付Ⅱ式以降、関門海峡を越えて愛媛県、徳島県、山口県、島根県に石材を利用した石槨墓系の墳墓が現れる。さらにこれらの遺跡が海浜部ではなく、内陸部の小河川域にある点に注目したい。このことは北部九州の玄界灘沿岸地域の集団が朝鮮南部の集団との接触により、石槨墓を新たな墓制として採用し、時期が下の板付Ⅱ式土器段階になって、関門海峡を越え、四国西部の松山平野や東部の徳島平野の集団と接触することにより、松山市西野Ⅲ遺跡、徳島市庄・蔵本遺跡ほかに石槨墓系の墳墓遺跡が成立したものと推定することはできないであろうか。これらの接触には海を介することが手っ取り早いばかりでなく、故地の環境に似て、先進の新しいものを受け入れる素地が無ければ実現しないことは当然であろう。なお、この推定は墳墓資料にのみ頼っていることでもあり、今後、集落や水田の発見が課題となる。石槨墓系の墳墓様式が伝わるには南朝鮮の集団が直接移動するばかりでなく、地域間交流の中

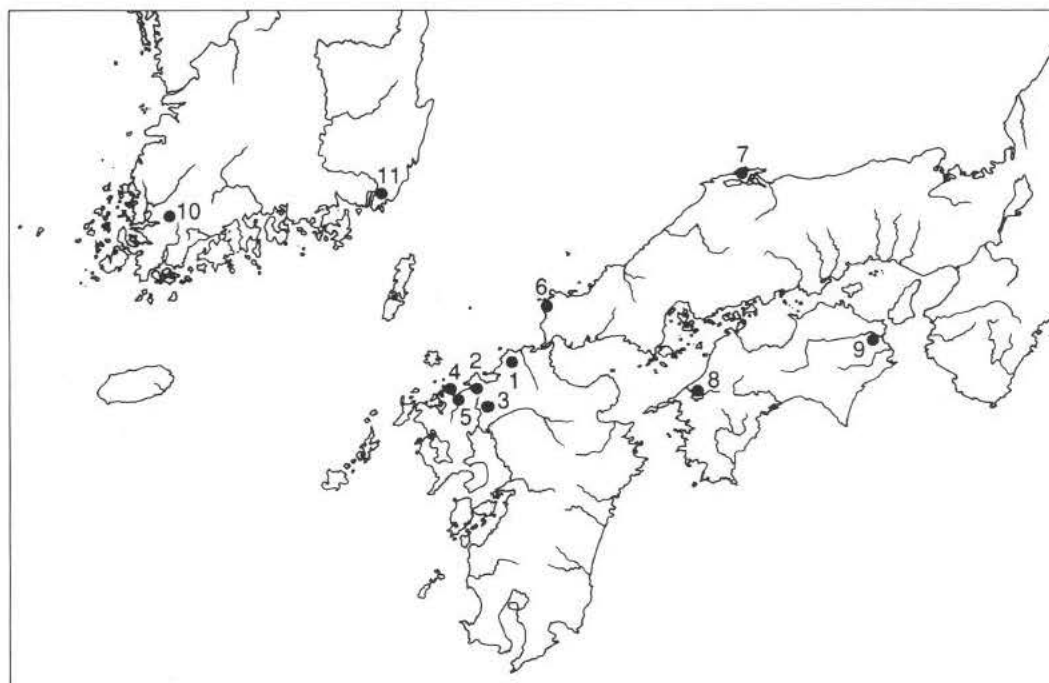
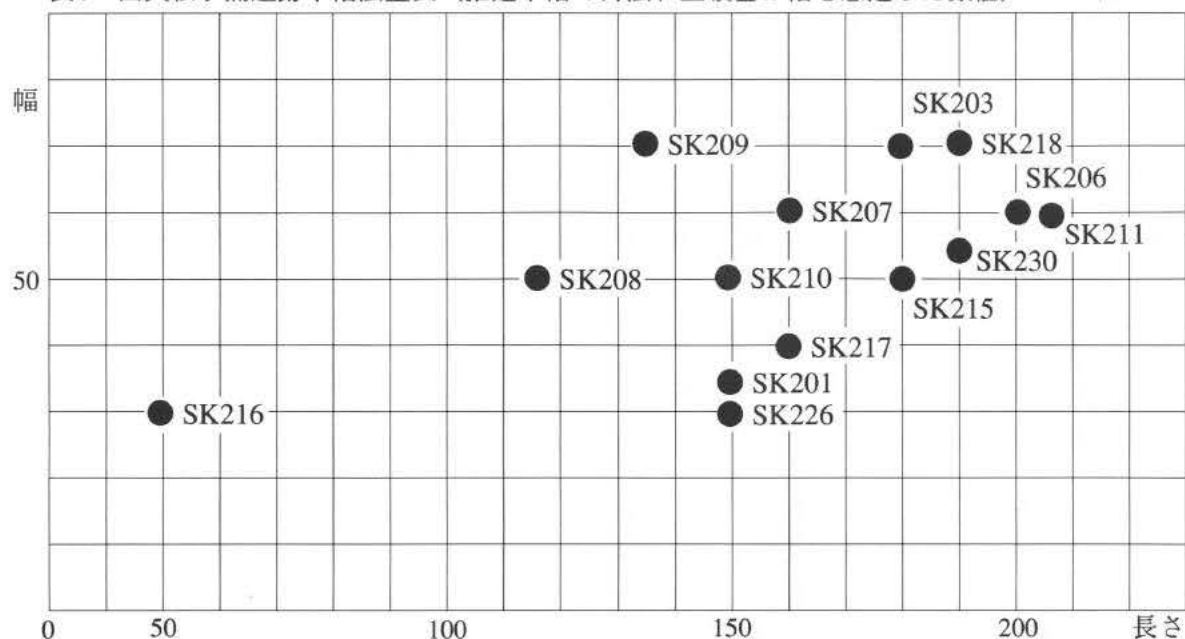
で、有用な要素のみを吸収して自らの集団内に取り込むことも当然考えられることである^{註14}。田久松ヶ浦遺跡の墳墓については、朝鮮半島から直接持ち込まれたのか、玄界灘沿岸の遺跡からの2次的導入とするかは、周辺資料の蓄積を待ちたい。

このこととは別に、弥生時代前期の土笛が、弥生時代前期中頃に山口県下関市の綾羅木遺跡にもたらされ、その後、前期末までの間に西は北九州市高槻遺跡、宗像市光岡長尾遺跡、東は島根県松江市西川津遺跡周辺、さらに丹後半島基部の京都府峰山町扇谷遺跡周辺に主要な分布をみるなど、関門海峡周辺を起点に日本海側の出雲・伯耆と丹後にのみ集中して見られることは、巧みな航海術に支えられた集団の移動・交流が一定の航海距離を目安にしていたことを窺い知ることができ、土笛を介した同質の農業祭祀を共有する農業集団のネットワークが弥生時代前期中頃以降、朝鮮半島南部を起点に、北部九州の北端から中国地方の日本海側で展開されていたものとすることができよう^{註15}。石槨墓を墓制とする集団にもこのことが適用できるとすれば、田久松ヶ浦遺跡から伊予の松山平野、さらに阿波の徳島平野とつながる瀬戸内ルートの海の道が成立するのではなかろうか。当然この海の道上の間に石槨墓系の墳墓を有する遺跡が今後発見されるものと考えられる。

本遺跡の弥生時代墳墓は、木棺を塊石で被覆するという石槨墓に磨製石器と小壺が共伴するという好資料に恵まれた。SK201において夜臼式土器と板付式土器が共伴し、他の小壺においても夜臼式土器と板付式土器との折衷が細部で認められた。さらにこれらの副葬小壺に有柄式磨製石剣及び有茎式柳葉形磨製石鏃が伴うという組合せは、弥生時代前期の宗像地域および北部九州玄界灘沿岸地域の墓制を探る上で、重要な調査となった。

表1 田久松ヶ浦遺跡木棺法量表（推定木棺の外法、土壌墓は棺を想定した数値）

単位：cm



第11図 田久松ヶ浦遺跡関連の遺跡分布地図

- | | | | |
|------------|-------------------|-------------|-------------------|
| 1. 田久松ヶ浦遺跡 | 2. 志登支石墓群・長野宮ノ前遺跡 | 3. 久保泉丸山遺跡 | 4. 五反田遺跡 |
| 5. 大友遺跡 | 6. 土井ヶ浜遺跡 | 7. 堀部第一遺跡 | 8. 持田町3丁目遺跡・西野Ⅲ遺跡 |
| 9. 庄・蔵本遺跡 | 10. 東葉杜邱洞イムソク遺跡 | 11. 和順大谷里遺跡 | |

註

- (1) 墳、槨、棺、室の定義は研究者間で完全に統一されているわけではない。墳、槨、棺の概念は中国の戦国から漢代の墳墓に求められるもので、漢代以降に室の概念が加わる。小林行雄は考古学辞典の「棺・槨」の項で『家礼』の記述から「遺骸をおさめた棺は槨の中におかれ、槨は墳の中につくられるわけである」としている。

『周礼』では槨について「棺を覆うかあるいは包み込むもの」としているもので、棺と槨の間には空間を持たなくともよいということになる。SK206・218は墳の中に置かれた棺を石材で覆う構造であり、槨の概念にあてはまる。

- (2) 徳島大学埋蔵文化財調査室 1998『庄・蔵本遺跡Ⅰ』徳島大学埋蔵文化財調査報告書第1巻

徳島市蔵本町所在。遺跡は徳島市街の西側にあって、吉野川河口から8kmほど上流である。吉野川右岸の支流である鮎喰川が形成した扇状地形の末端にあって、標高3mの微高地に弥生時代前期の石棺墓2基、配石墓13基、土墳墓6基、甕棺墓1基が30×15mの範囲に分布する。遺構は、ほぼ東西に長軸を置き、東西に長い列埋葬が認められる。墓域内の遺骸収容空間形態を①石棺、②木棺、③木棺なし、④甕棺とし、墓域内に石材がみられるものの使用法を(A) 棺材、(B) 裏込め石、(C) 棺蓋、(D) 標石に分け、遺構を箱式石棺墓、石蓋木棺墓、配石木棺墓、木棺直葬墓、木棺直葬墓ないし土墳墓、甕棺墓の6種に分類している。各遺構の年代を出土土器から前期中葉の短期間に限定している。

- (3) 堀部第一遺跡 山陰中央新報 1998年10月3日号、1999年3月20日号

島根県八束郡鹿島町南講武所在。島根半島中部の日本海側にあって、海岸から2kmほど内陸に入った佐陀川支流の講武川沿いの水田下から弥生時代前期の墳墓23基が出土した。長方形墓域内に木棺を据え、墓域上に塊石を積み上げた墓を主体としている。出土遺物には木棺材や土笛、遠賀川式土器がある。弥生時代前期中頃とされている。

- (4) 長井数秋 1977「愛媛県西野Ⅲ遺跡の調査」『考古学ジャーナル』140

長井数秋 1978『西野Ⅲ遺跡』愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

長井数秋 1982「西野Ⅲ遺跡」『古代の松山平野』市民双書24

長井数秋 1986「西野Ⅲ遺跡」『愛媛県史』資料編 考古解説

長井数秋 1987「西野Ⅲ遺跡」『松山市史』資料集第二巻

松山市上野町乙所在。1975～77年調査。遺跡は重信川河口から9kmほど上流にあって、支流の砥部川右岸段丘上の標高82m前後の台地上に、弥生時代前期の土器棺墓2基を含む71基の墳墓が56×25mの範囲に分布する。分布域の中央部に墓域の主軸を同じくする2列埋葬の帯が認められる。この帯の周辺に方位を違える墳墓が取り巻くように配置されている。県史資料編では遺構形態について①単純土墳墓、②四隅に川石を配した土墳墓、③四隅および両側壁に列状に川石を配した土墳墓、④墓域内全面に扁平な川石を貼り付けた土墳墓の4種に分け、②・③を石詰式木棺土墳墓、④を敷石式木棺土墳墓とし、各遺構の年代を出土土器から前期中葉としている。第12号土墳墓は、敷石式木棺土墳墓とされるもので、長軸1.97m、短軸1mほどの長方形墓域の床全面に扁平な川原石を敷き、四壁には敷石直上から塊石を積み上げている。壁面の石積みは不安定で、墓域内に落ち込みかけるようにして検出されている。石積み上面は蓋石等の痕跡はなく、木蓋を用いて内部空間を閉じたものと推定できる。この種の遺構は基本的には礫床の上に木棺を設置し、棺と墓域壁の空間を塊石を用いて棺の固定化と被覆を意図したものと考えることができ、石槨墓とすることができる。石詰式木棺土墳墓は墓域壁に沿って塊石を配しているが、床面直上に一段のみのものや床面から浮いた位置に配置があるものなどがあり、木棺を固定するためのさまざまな工夫の結果であろう。

- (5) 趙由典 1984「全南和順青銅遺物一括出土遺蹟」『尹武炳博士回甲紀念論叢』

全羅南道和順郡道谷面にあって、青銅器時代の石槨墓が偶然発見された。東西330cm、南北180cmの長方形墓域を

北側から深さ 60cm まで壁を斜めに掘り込み、一段目の墳底を平坦に仕上げた後、南側に寄ったところで長さ 210cm、幅 80cm、深さ 53cm の埋葬墳を掘っている。埋葬墳底に細かな粘土を敷き、その上に木板を置き、屍床としている。木棺と埋葬墳壁の空間には四壁ともに 15～20cm ほどの石を 2～3 段積み上げて櫛構造としている。棺は結果として長さ 180cm、幅 50cm、深さ 40cm に復元できる。埋葬墳の上面は、周辺に掘り出された石材の中に長さ 150cm、幅 50cm 以上の板状石材があったことから、石櫛の蓋石として考えられている。蓋石上は墓墳上面まで石と土で墓墳内を埋め、墓墳上には何らの標識も置かなかったものと推定されている。出土遺物は細文鏡、細形銅剣、八頭鈴具、双頭鈴具、青銅袋斧、青銅ヤリガンナがある。築造時期は B.C.5～4 世紀とされている。

(6) 宋桂鉉 1987『東萊杜邱洞 イムソク遺跡発掘調査概報』『嶺南考古学』4

遺跡は慶尚南道釜山市東萊にあつて、石櫛墓が 1 基調査された。遺構は長さ 300cm、幅 105cm、深さ 70cm の墓墳の内部に割石で長さ 145cm、幅 60cm、深さ 60cm の石櫛を築いている。四壁の石積みは整然と積み上げたものではなく、南側長側壁の石は中央側になだれ込み、原位置に石のないところがある。墓墳底には木棺を置く範囲に砂利を敷いてその上に木棺を置き、棺と墓墳の空間には石と土を充填している。床面から 35cm ほどの高さにある壁石の 1～2 段分はすべて内側に入っている。石櫛の上部は石櫛と 10～20cm の間隔をおいて 30～70cm ぐらいの塊石を 1～2 層、敷き詰めている。中央部のものは石櫛内部に陥没していた。この石の範囲は石櫛の墓墳より少し広い。一方東短側壁には長さ 1m の板石が 1 枚横にかかっている。この板石と石櫛との高さが他の部分においても一定なものとみると、1 枚の板石のほかは木蓋を使用し、その上に上記の塊石で石櫛全体を覆っていたものと解釈できる。出土遺物は磨製石槍 1 点と無文土器 1 点が出土した。この石櫛墓の時期は B.C.3～2 世紀とされている。(釜山直轄市博物館が 1990 年に発行した『釜山杜邱洞林石遺蹟』報告書は未見である。)

(7) 愛媛県埋蔵文化財センター 1995『持田町 3 丁目遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第 58 集

松山市持田町 3 丁目所在。遺跡は海から 8km ほど内陸の松山市街地にある。石手川の氾濫に起因する扇状微高地の南東斜面に位置し、標高約 35m の台地上に、弥生時代前期の土器棺墓 9 基を含む 33 基の墳墓が 40×20m の範囲に分布する。分布の中心域には整然とした 2 列埋葬の配置が見られる。

遺構の形態は A：木棺を据えた後、裏込めに土と礫を使用したもの、B：小口に礫を使用した木棺相当施設、C：小口部にコ字形配置の礫があるもので、天井にのみ木板材を使用したもの、D：四壁に礫を粗に配し、天井にのみ木板材を使用したもの、E：素掘りのもの、F：甕棺墓の 6 種に分類している。A～D については墓墳内に木棺を据えた後、棺と墓墳壁の空間を礫で固定したものとすることができる。各遺構から出土した土器から弥生時代前期前半新段階から前期後半新段階に墳墓の時期が当てられている。

(8) (財)松山市生涯学習振興財団 1993『東山古墳群 6 次調査地』松山市埋蔵文化財調査年報 V

松山市東石井町乙 39—2 ほか所在。1992～93 年の調査。松山市のほぼ中央にあつて、重信川と石手川に挟まれた洪積台地上の標高 32～45m の緩斜面に遺構の分布がある。このうち、2 区の標高 45m 前後の丘陵緩斜面から 5 基の土墳墓が検出され、SK1・2 は長方形土墳墓で、墓墳内に 20～30cm 大の塊石を配している。SK2 は長さ 1.93m、幅 0.54～0.77m、深さ 30cm 程度を残し、上半部を失っている。墓墳底はほぼ平坦で、南側小口部の幅が広く、墓墳内の南側短側壁に 3 石と西側壁の一部に 2 石の塊石を配している。南側短側壁の配石からやや内側に円筒状の器形を有する土器が出土している。口縁下と底部直上に貼り付け突帯が各一条めぐる。遺物は縄文時代晩期～弥生時代前期に捉えられている。墓墳内の石は木棺を固定するために配されたものとする事ができよう。副葬の土器については棺内副葬とすれば長さ 160cm 前後の棺長が考えられるが、棺外であったとしても 140cm 前後の棺長は確保することができる。成人の木棺墓とすることができる。(調査を担当された田城武志・高尾和長には未報告資料である遺構および遺物図の提供をいただいた。記して感謝いたします。)

(9) 前原町教育委員会 1989『長野川流域の遺跡群 I』前原町文化財調査報告書第 31 集

前原市大字長野所在。遺跡は糸島平野のほぼ中央を北流する長野川右岸の沖積扇状地に位置する。長野川河口から6 kmほど上流である。標高34m前後の水田直下から弥生時代早期の木棺墓15基、支石墓2基、土墳墓21基、甕棺墓1基が19×14mの範囲に分布する。報告書では①不整形土墳墓10基、②支石墓・木棺墓23基、③小型土墳墓4基に分類する。支石墓・木棺墓は「(1)長軸方向が東西ないし南北方向を意識している。(2)遺構の配置が南北方向に4列、整然と並ぶ。(3)墓域内に木棺が採用されている(15基)。(4)被葬者の頭部に朱が塗られている。(5)墓域上には標石が認められるものがあり、38・39号墓では支石墓の形態となる。(6)5・12号墓から刃部ないし茎部を欠いた石鏃が出土することから、戦争の存在を想定している。」などを特色として指摘している。また、木棺墓には墓域底に石敷きの棺台を有するもの、棺と墓域壁の空間を塊石で裏込めするものがあり、市内の支登支石墓群、佐賀県唐津市五反田遺跡、佐賀市久保泉丸山遺跡にも同様の類例がみられることから弥生時代早期に定着した墳墓形態であるとしている。

(10) 志摩町教育委員会 1987『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書第7集

糸島郡志摩町大字新町所在。遺跡は加也山を背にした標高4m前後の砂丘上にあり、西側の引津湾の海岸線から180mほどである。第1次調査の第1地点は畑地直下から弥生時代早・前期の墳墓を21×16mの範囲から検出している。墓域は調査区よりさらに広がりを見せる。検出した57基の墳墓は支石墓7基、甕棺墓4基、土墳・木棺墓46基で、支石墓2基、甕棺墓4基、土墳・木棺墓27基の計33基が全掘された。このうち、支石墓の埋葬主体は木棺とされ、副葬小壺は墓域外にあって、上石の縁に置かれる。土墳・木棺墓は整った長方形で、素掘りと二段掘りのものがある。墓域底に礫が配されるものは木棺の棺台とされ、域内にみられる石材は木棺を固定するための裏込め石とされている。墓域上に配されている石材は標石もしくは支石墓の支石と考えられている。副葬土器はすべて棺外の出土である。24号墓では人骨に磨製石鏃が嵌入して出土し、墓域底からさらに掘り込まれた域内から別個体の歯が出土した例は、この地域での争いの結果とされる。墓域中にみられる石材は木棺を固定するための裏込めの役目を果たしていることがわかる。各遺構から出土した土器は曲り田(古)式～板付Ⅰ式に編年され、57基の墳墓はおおよそ3世代にわたって形成されたものとされ、墳墓の時期を弥生時代早期～前期前半としている。

(11) a 福岡県教育委員会 1985『石崎曲り田Ⅲ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集

b 田崎博之 1994「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』

(12) 下條信行 1991「西日本一第Ⅰ期の石剣・石鏃 4石製武器」『日韓交渉の考古学』弥生時代篇

(13) 宗像市教育委員会 1988『久原遺跡』宗像市文化財調査報告書第19集

久原遺跡のⅡ区の弥生時代前期墓地は、板付Ⅰ式新段階から墳墓形成がはじまり、木棺墓中に棺台を有するものが認められることから、田久松ヶ浦遺跡のSK218との連続性を指摘することができる。

(14) 金関恕・大阪府立弥生文化博物館 1995「第3章 討論 弥生文化成立のプロセス」『弥生文化の成立』角川選書

この中で、弥生時代成立期の土器、石器、水田稲作について、北部九州の在地集団は朝鮮半島からの導入にあたって、在地集団にはない有用なものを、必要に応じて新たに受け入れるということを行い、受け入れたものについては、朝鮮半島のものそのままとしてではなく、在地集団の中に溶け込ませ、変化させて自らのものとしている。その後、さらに東方へ伝わるときには上記と同じような手順でリレー式に次々と伝わって在地集団にとって有用なもののみが受け入れられていったものであると述べられている。

本報告書に掲げている墓域に積み石や石材を配する墳墓は弥生時代前期に朝鮮半島から北部九州に入り、東方へ伝わっていく過程で、墳墓の構造に変容をおこしながら、ある要素は用いられ、他の要素は欠落して、在地の墓制の中に受け入れられていったものと考えられる。

(15) 原俊一 1998「土笛」『歴史九州』97号

表2 田久松ヶ浦遺跡弥生墳墓一覧表

※単位：m

番号	遺構番号	調査区	主軸方位	埋葬墳の 平面形	構造	埋葬墳の規模			埋葬墳の床面規模		出土遺物
						長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	
1	SK201	C区	N-86°-W	長楕円形	土墳墓	1.68	0.46	0.46	1.50	0.34	有柄式磨製石剣1、壺2 有茎式磨製石鏃3
2	SK203	C区	N-2°-W	隅丸長方形	木棺墓	2.65	0.96	0.89	2.32	0.72	壺1、有茎式磨製石鏃2
3	ST204	C区	N-69°-W	楕円形	小児用甕棺	0.37 α	0.46	0.16			
4	SK206	C区	N-78°-W	隅丸長方形	木棺墓 (二段掘込)	2.75 墓墳 3.11 α	1.10 墓墳 1.69	0.60 墓墳 0.18	2.28	0.62	有柄式磨製石剣1 有茎式磨製石鏃1、壺1
5	SK207	C区	N-74°-W	隅丸長方形	木棺墓	2.50	1.13	0.57	1.74	0.77	
6	SK208	C区	N-65°-W	隅丸長方形	木棺墓	1.87	0.72	0.47	0.94	0.37	扁平片刃石斧1、壺1
7	SK209	C区	N-27°-E	長方形	木棺墓	1.44	0.74	0.19	1.34	0.74	
8	SK210	C区	N-42°-W	長方形	木棺墓	1.99	0.65	0.49	1.82	0.51	壺1、有茎式磨製石鏃4
9	SK211	C区	N-46°-W	長方形	木棺墓	2.26	0.75 α	0.47	2.00	0.62	壺1
10	SK215	C区	N-60°-W	隅丸長方形	木棺墓	2.10	0.70	0.14	1.77	0.52	
11	SK216	C区	N-2°-E	楕円形	小児用土墳墓	0.77	0.42	0.22	0.53	0.29	
12	SK217	C区	N-66°-W	隅丸長方形	木棺墓	1.88	0.58	0.40	1.56	0.43	
13	SK218	C区	N-66°-W	隅丸長方形	木棺墓	2.68	1.13	0.94	2.10	0.68	有茎式磨製石鏃2、壺1
14	SK226	B区	N-53°-W	長楕円形	土墳墓	1.83	0.47	0.28	1.64	0.32	壺1
15	SK230	B区	N-33°-W	長方形	木棺墓	1.94	0.66	0.14	1.88	0.56	

表3 田久松ヶ浦遺跡出土石剣・石鏃一覧表

※単位：cm・g、数値は既存値

番号	遺物名	遺構番号	全長	身長	身幅	身厚	柄長	柄幅	鏑長	鏑幅	遺物番号	石 材
1	有柄式磨製石剣	SK201	22.6 α	12.8	2.8 ~ 4.1	1.0	9.0	5.7	0.8	4.5	006	不明
2	有柄式磨製石剣	SK206	38.4	28.6	2.6 ~ 3.3	0.9	9.0	3.0 ~ 8.2	0.8	5.6	013	粘板岩か
番号	遺物名	遺構番号	全長	身幅	身厚	重さ	茎長	石材	取上 No.	遺物番号	備 考	
3	有茎式磨製石鏃	SK201	14.4	1.1	0.60	6.50	1.90	粘板岩	1	003	刃部は調査時に欠損	
4	有茎式磨製石鏃		12.9	1.4	0.70	6.70	2.50	粘板岩	2	004	切先をわずかに欠いている	
5	有茎式磨製石鏃		15.0	1.4	0.70	8.70	2.70	粘板岩	3	005	刃部は調査時に欠損	
6	有茎式磨製石鏃	SK203	13.0	1.4	0.90	8.90	2.70	粘板岩	1	008	完形	
7	有茎式磨製石鏃		7.2	1.3	0.70	5.00	1.20	頁岩	2	009	切先をわずかに欠いている	
8	有茎式磨製石鏃	SK206	9.2	1.3	0.60	5.50	1.95	頁岩		012	切先・基部・刃部をわずかに欠いている	
9	有茎式磨製石鏃	SK210	14.7	1.7	0.50	10.10	3.60	粘板岩	1	017	基部をわずかに欠いている	
10	有茎式磨製石鏃		11.3	1.3	0.70	10.50	2.00	粘板岩	2	018	ほぼ完形	
11	有茎式磨製石鏃		10.9	1.2	0.80	7.30	2.60	千枚岩	3	019	完形	
12	有茎式磨製石鏃		10.5	1.4	0.70	8.60	2.30	粘板岩	4	020	切先・基部をわずかに欠いている	
13	有茎式磨製石鏃	SK218	13.6	1.4	0.80	9.40	3.10	粘板岩	1	022	刃部を欠いている	
14	有茎式磨製石鏃		10.9	1.4	0.70	8.80	1.10	粘板岩	2	023	切先・基部をわずかに欠いている	

表4 田久松ヶ浦遺跡竪穴住居一覧表

※単位：m

番号	遺構番号	調査区	平面プラン	長軸	短軸	最深	主柱穴	ベッド	炉	屋内土坑	周壁溝	床面溝	備考（出土遺物等）
1	SC101	B区	方形	4.71	3.95	0.78	2	東辺・西辺	○	○	×	×	土器集積
2	SC102	B区	方形	4.9	1.92+ α	0.34	2	南辺・北西角	○	?	○	×	西辺溝重複、改変？
3	SC103	B区	方形	4.71	3.95	0.75	2	南辺・北西角	○	○	○	○	屋内土坑より砥石・蔽石、埋土より石包丁
4	SC104	B区	方形	3.6	2.6+ α	0.41	不明	北西角	○	○	○	○	屋内土坑より土器片
5	SC105	B区	方形	5.2	3.8	0.5	2	南辺	○	○	×	○	
6	SC106	B区	方形	4.02	3.96	0.65	4	西辺	○	○	○	○	屋内土坑より台石
7	SC107	B区	方形	5.8	3.95	0.46	2	南辺・北辺	○	×	○	○	床面より土器片・不明鉄器
8	SC110	B区	方形	4.15	3.3+ α	0.46	不明	北西角	○	?	×	×	炉址より土器片
9	SC150	B区	方形	3.51	2.94+ α	0.20	不明	北辺	?	?	○	○	土器片
10	SC205	C区	方形	5.34	4.4	0.38	2	無	×	×	×	×	
11	SC212	C区	円形	直径 (7.1)		0.5	5	無	?	○	○	×	土器片・黒曜石

表5 田久松ヶ浦遺跡落穴状遺構一覧表

※単位：m

番号	遺構番号	調査区	平面プラン	規 模		床面規模		深 さ	杭 痕	備 考
				長 軸	短 軸	長 軸	短 軸			
1	SK130	B区	隅丸方形	1.25	0.88	0.39	0.37	1.45	6	
2	SK134	B区	方形	1.67	(1.2)	1.12	0.90	1.29	9	
3	SK149	B区	円形	1.2	1.0+ α	0.66	0.52	1.6	1	
4	SK148	B区	方形	0.98	0.68	0.92	0.60	0.36	4	
5	SK219	C区	円形	0.84	0.74	0.5	0.44	1.05	10	
6	SK220	C区	方形	0.98	0.62	0.82	0.39	1.2	8	

表6 田久松ヶ浦遺跡貯蔵穴一覧表

※単位：m

番号	遺構番号	調査区	床面形状	底面径	最深部	主な出土遺物	備 考
1	SU001	A区	円形	2～2.15	0.65	土器片・水晶塊	
2	SU002	A区	円形	1.55～1.65	0.65	土器片	
3	SU003	A区	円形	1.85	0.6	土器片	底面に不整形の窪み
4	SU004	A区	円形	1.7	0.08	土器片	床面より焼土塊
5	SU005	A区	円形	1.7～1.8	0.94	土器片	埋土中に礫集積・床面に柱穴
6	SU213	C区	扁楕円形	0.8～0.95	0.46	土器片	底面に不整形の窪み
7	SU214	C区	不整円形	1.3～1.5	1.04	土器集積	

表7 北部九州における縄文晩期～弥生前期の遺物を伴う墳墓地名表
(福岡県)

市町村名	遺 跡 名	遺 構 名	有柄式磨 製石剣	有茎式磨 製石鏃	壺	装身具	その他の出土遺物	文献
宗像市	田久松ヶ浦遺跡	201号土壌墓	1	3	2			
		203号木棺墓		2	1			
		206号木棺墓	1	1	1			
		208号木棺墓			1		扁平片刃石斧 1	
		210号木棺墓		4	1			
		218号木棺墓		2	1			
	久原遺跡	Ⅱ-1			1			1
		Ⅱ-5			1			
		Ⅱ-8	1	4				
福岡市	蒲田遺跡	A地区2号土壌墓		2				2
	吉武遺跡群第1次	甕棺墓			1		細形銅剣切先 1	3
	吉武高木遺跡	100号甕棺墓					細形銅剣 1	3
		109号甕棺墓				碧玉製管玉 10		
		110号甕棺墓				硬玉製勾玉 1、 銅釧 2、碧玉製 管玉 74		
		111号甕棺墓				碧玉製管玉 92		
		117号甕棺墓			1	硬玉製勾玉 1、 ガラス小玉、碧 玉製管玉 42		
		125号甕棺墓		1				
	吉武大石遺跡	1号甕棺墓					細形銅戈片 1	3
		10号甕棺墓					磨製石鏃 1	
		45号甕棺墓					細形銅剣 1、細形銅戈 1	
		51号甕棺墓				碧玉製管玉 11	細形銅剣 1	
		60号甕棺墓					磨製石剣切先 1	
		67号甕棺墓					細形銅矛 1	
		70号甕棺墓					細形銅戈片 1	
		71号甕棺墓					青銅器片 1	
		81号甕棺墓					磨製石剣切先 1	
		140号甕棺墓					細形銅剣 1(木製鞘入 り)	
	藤崎遺跡第2地点	甕棺墓(6ないし 7基の合わせ甕)			9			4
	藤崎遺跡第2次	甕棺墓				碧玉製管玉 4		4
	飯倉丸尾遺跡	甕棺墓					細形銅剣 1	5
	西福岡高校遺跡	甕棺墓					細形銅戈 1	6
	有田遺跡群第86次	1号甕棺墓					打製石鏃 1	7
		3号甕棺墓			1			
	カルメル修道院内遺跡	木棺墓				銅釧 3		3b
	板付田端遺跡	甕棺墓 3基					銅剣 4、銅矛 3	8
	板付遺跡 54次、59次	3号甕棺墓			1			9
		4号甕棺墓				碧玉製管玉 1		
		5号甕棺墓				碧玉製管玉 2		
		6号甕棺墓			2			
	金隈遺跡	95号甕棺墓					磨製石鏃 1	10
		103号甕棺墓				ゴホウラ製貝輪 2	磨製石鏃 1	
	飯倉唐木遺跡	7号甕棺墓			1			11
		10号甕棺墓					細形銅剣 1	
		15号甕棺墓			1			
		16号甕棺墓			2			
		17号甕棺墓			1			
		25号甕棺墓			1			
		30号甕棺墓			1			
		36号甕棺墓				碧玉製管玉 3	磨製石鏃 1	
		45号甕棺墓					滑石製石製品 1	
		1号土壌墓			1			
		9号土壌墓					磨製石鏃 1	
		11号土壌墓			1			
		27号土壌墓			1			
		29号土壌墓					打製石鏃 1	
	飯氏遺跡群Ⅱ区	14号甕棺墓					打製石鏃 1	12
		20号甕棺墓					磨製石鏃 2	
		25号甕棺墓					打製石鏃 1	

市町村名	遺 跡 名	遺 構 名	有柄式磨 製石剣	有茎式磨 製石鏃	壺	装身具	その他の出土遺物	文献
	下月隈天神森遺跡 3 次	7 号甕棺墓			1			13
		16 号甕棺墓			1			
		27 号甕棺墓			1			
		30 号甕棺墓			1			
		33 号甕棺墓			1			
		38 号甕棺墓			1			
		3 号木棺墓			2			
		4 号木棺墓			3			
		9 号木棺墓			1			
		11 号木棺墓			1			
		12 号木棺墓			1			
		14 号木棺墓			1			
		15 号木棺墓			1			
		17 号木棺墓			1			
		18 号木棺墓			1			
		19 号木棺墓			1			
		20 号木棺墓			1			
		21 号木棺墓			1			
		25 号木棺墓			1			
		26 号木棺墓			1			
		28 号木棺墓			1			
		30 号木棺墓			1			
		32 号木棺墓			1			
		34 号木棺墓			2			
	周船寺遺跡 8 次	ST-02 甕棺墓					磨製石剣鋒 1	14
新宮町	白峯遺跡	5 号土墳墓					石剣切先 1	15
		16 号土墳墓					磨製石剣 1	
		17 号土墳墓					石剣切先 1	
志免町	松ヶ上遺跡	1 号甕棺墓				管玉 1		16
前原市	石ヶ崎墓地	4 号甕棺墓				管玉 1		17
		6 号支石墓					打製石鏃 6	18
		8 号支石墓		4				
	三雲遺跡	加賀石地区支石墓		6				19
		石橋地区 7 号甕棺墓					磨製石剣 1	20
	長野宮ノ前遺跡	5 号墓					打製石鏃 1	21
		12 号墓		2				
		38 号墓			1			
		39 号墓			1			
二丈町	曲り田遺跡	2 号甕棺墓					磨製石剣切先 1、磨製石鏃 1、打製石鏃 1	22
		11 号甕棺墓					不明鉄器	
		支石墓			1			
	大坪遺跡	5 号甕棺墓				碧玉製管玉 15		23
		13 号甕棺墓				硬玉製管玉 1、硬玉製丸玉 1		
志摩町	新町遺跡第一地点	4 号墓 (未調査)			2			24
		5 号墓			1			
		6 号墓 (未調査)			1			
		8 号墓 (未調査)			1			
		9 号墓			1			
		10 号墓 (未調査)			1			
		11 号墓			1			
		12 号墓			1			
		13 号墓			1			
		14 号墓			1			
		15 号墓			1			
		16 号墓			1			
		17 号墓			1			
		20 号墓			1			
		22 号墓			1			
		23 号墓			1			
		24 号墓		1	2			
		25 号墓			1			
		27 号墓			1			
		34 号墓			1			

市町村名	遺 跡 名	遺 構 名	有柄式磨 製石剣	有茎式磨 製石鏃	壺	装身具	その他の出土遺物	文献
志摩町	新町遺跡第一地点	35号墓(未調査)			1			24
		38号墓			1			
		39号墓(未調査)			1			
		45号墓			1			
		48号墓			1			
		49号墓			1			
		50号墓				碧玉製管玉 1		
		53号墓				碧玉製管玉 1		
		56号墓			1			
	新町遺跡二次	Ⅱ-02eトレンチ1号墓 (未調査)			1			25
		Ⅱ-02eトレンチ2号墓 (未調査)			1			
		Ⅱ-02bトレンチ1号墓 (土壌墓)			1			
		Ⅱ-03トレンチ2号甕 棺墓			1			
		Ⅱ-03トレンチ3号墓 (土壌墓)			1			
春日市	伯玄社遺跡	24号土壌墓		6				26
	岡本四丁目遺跡	3号土壌墓					鉄剣 1	27
那珂川町	松木遺跡	4号土壌墓					磨製石鏃 1	28
		150街区7号土壌 墓				碧玉製管玉 1		29
	安德・道善・片縄地区 区画整理事業地内	6地点40号甕棺墓				銅釧?		3b
		10地点7号甕棺墓				碧玉製管玉		
	観音堂遺跡群	14号甕棺墓					磨製石剣 1	30
		74号甕棺墓				碧玉製管玉 12		
筑紫野市	塔の原遺跡	4号土壌墓			1			31
		1号土壌墓			1			32
	道場山遺跡2地点	1号木棺墓			1			
		2号木棺墓			1			
	剣塚遺跡	1号土壌墓					打製石鏃 1	33
		3号土壌墓			1			
		4号土壌墓			1	軟質玉製管玉 7		
		9号土壌墓		1			磨製石鏃 1	
		1号甕棺墓			1			
		2号甕棺墓					打製石鏃 2	
		14号甕棺墓			1			
		15号甕棺墓			1			
		16号甕棺墓			1			
夜須町	大木遺跡	5号土壌墓			1	翡翠製管玉 1		34
		6号土壌墓			1			
		7号土壌墓				翡翠製勾玉 1、 アマゾナイト製勾玉 1、 翡翠製小玉 8、 翡翠製管玉 5	打製石鏃 1	
久留米市	汐入遺跡	SX-4 土壌墓					甕 1	35
		SX-5 土壌墓			2		甕 2	
		SX-6 土壌墓			1		甕 5、砥石片 1、黒曜石 チップ 3	
大野城市	中・寺尾遺跡1次	2号甕棺墓			1			36
		5号甕棺墓			1			
		6号甕棺墓			1			
		7号甕棺墓			1			
		8号甕棺墓			1			
		8号土壌墓					磨製石剣 1	
		18号土壌墓			1			
		19号土壌墓			1			
		25号土壌墓			1			
		26号土壌墓			1			
		27号土壌墓			1			
	中・寺尾遺跡2次	1号土壌墓			1			37
		2号土壌墓			1			
		3号土壌墓			1			

市町村名	遺 跡 名	遺 構 名	有柄式磨製石剣	有茎式磨製石鏃	壺	装身具	その他の出土遺物	文献
大野城市	中・寺尾遺跡 2 次	6 号土墳墓			1			37
		10 号土墳墓			1			
		11 号土墳墓			1			
		12 号土墳墓			1			
		13 号土墳墓			1			
		14 号土墳墓			1			
		18 号土墳墓			1			
		2 号甕棺墓		1	1			
		5 号甕棺墓			1			
		13 号甕棺墓			1			
		17 号甕棺墓		2	1			
		19 号甕棺墓			1			
		23 号甕棺墓			1			
	御陵前ノ椽遺跡	SJ-05 甕棺墓			2			38
		SJ-06 甕棺墓			1			
		SJ-07 甕棺墓			1			
		SJ-08 甕棺墓			1			
		SJ-09 甕棺墓			1			
		SJ-10 甕棺墓			1			
		SJ-12 甕棺墓			1			
		SJ-15 甕棺墓			1			
小郡市	三国の鼻遺跡	1 号木棺墓					打製石鏃 2	39
		4 号木棺墓					打製石鏃 2	
		6 号木棺墓		2			打製石鏃 15	
		10 号木棺墓			1			
		18 号木棺墓			1			
		19 号木棺墓			1	グリーンタフ製管玉 3		
		20 号木棺墓			1	グリーンタフ製管玉 1		
		25 号木棺墓			1			
		26 号木棺墓			1			
		31 号木棺墓				グリーンタフ製管玉 1		
		21 号甕棺墓			1			
	ハサコの宮遺跡	16 号木棺墓					磨製石剣基部 1	40
		17 号木棺墓					磨製石剣切先 1	
		土墳墓					磨製石鏃 1、磨製石剣片 2	
	北牟田遺跡	12 号木棺墓					銅剣切先 1	40
		48 号木棺墓					磨製石剣切先 3	
		15 号甕棺墓					打製石鏃 1	
鞍手町	高木遺跡	2 号土墳墓					磨製石剣 1、磨製石鏃 1、打製石鏃 1	41
		7 号土墳墓				水晶玉 2、軟玉製管玉 11、ガラス小玉 8		
		15 号土墳墓					磨製石剣 1	
		16 号土墳墓					磨製石鏃 2	
		30 号土墳墓				碧玉製管玉 1		
		33 号土墳墓				碧玉製管玉 4		
北九州市	井手尾遺跡	6 号土墳墓					石剣切先 1	42
		14 号土墳墓				層灰岩製管玉 1		
		24 号石蓋土墳墓			1			
		36 号土墳墓					甕 1	
行橋市	竹並遺跡	1 号土墳墓					石剣切先 1、石戈切先 1	43
		9 号土墳墓					石剣切先 1	
		12 号土墳墓					石剣切先 1	
	下稗田遺跡 I 地区	9 号土墳墓					石剣 1	44
築城町	下清水遺跡	1 号石棺墓					磨製石鏃 1	45
		3 号石棺墓					土製円盤 1	
		4 号石棺墓				碧玉製管玉 34、土製管玉 1		

〈佐賀県〉

市町村名	遺 跡 名	遺 構 名	有柄式磨製石剣	有茎式磨製石鏃	壺	装身具	その他の出土遺物	文献
佐賀市	大野原遺跡	SP-262 土墳墓					甕 1	46
唐津市	宇木汲田遺跡	18 号甕棺墓					細形銅剣 1	
		19 号甕棺墓				碧玉製管玉 8		

市町村名	遺 跡 名	遺 構 名	有柄式磨 製石剣	有茎式磨 製石鏃	壺	装身具	その他の出土遺物	文献
唐津市	宇木汲田遺跡	61号甕棺墓					細形銅剣 1	46
		86号甕棺墓				碧玉製管玉 1		
		87号甕棺墓				碧玉製管玉 14		
		88号甕棺墓				碧玉製管玉 7		
		94号甕棺墓				碧玉製管玉 5		
		111号甕棺墓					磨製石鏃 1	
		113号甕棺墓					打製石鏃 1	
	葉山尻支石墓	4号支石墓					打製石鏃 1	46
浜玉町	五反田支石墓	5号支石墓(未調査)			1			
		3号支石墓			1			46
呼子町	大友遺跡 1次	6号土墳墓			1			
		1号甕棺墓				イモガイ製貝輪 10		46、47
	大友遺跡 3次	9号甕棺墓				イモガイ製貝輪 1		
		1号箱式石棺墓					石剣 1	
		3号箱式石棺墓				ゴホウラ貝製貝輪 3		
		4号配石墓			1			
		12号甕棺墓					アワビ貝、アワビ貝片	
		34号再葬墓				イモガイ製貝輪 3		
	大友遺跡 4次	40号配石墓			1			
		44号甕棺墓				翡翠製勾玉(垂玉)1		
肥前町	押川遺跡	SJ-002 甕棺墓				管玉 4		48
金立町	東千布遺跡	SJ-003 甕棺墓					磨製石剣片 1	49
久保泉町	久保泉丸山遺跡	SA-016 支石墓			2		甕 1、鉢 1、浅鉢 1	50
		SA-017 支石墓			3			
		SA-019 支石墓			2			
		SA-021 支石墓			1		浅鉢 1	
		SA-022 支石墓					浅鉢 2、高坏 1、甕 1	
		SA-023 支石墓				緑色片岩製管玉 1		
		SA-024 支石墓			1		甕 1	
		SA-025 支石墓			1			
		SA-026 支石墓			3		高坏 1	
		SA-027 支石墓			1			
		SA-028 支石墓					浅鉢 1	
		SA-030 支石墓			1		高坏 1	
		SA-031 支石墓			1		浅鉢 1、土器底部(小型甕?) 1	
		SA-036 支石墓			1	土製管玉 2	甕 1	
		SA-042 支石墓					甕 1	
		SA-046 支石墓			1		深鉢 1、土器底部 1	
		SA-048 支石墓			2			
		SA-049 支石墓			1		土器底部 2、土製紡錘車 1	
		SA-051 支石墓			1			
		SA-052 支石墓			2			
		SA-053 支石墓					甕 2	
		SA-055 支石墓					浅鉢 1	
		SA-059 支石墓			1		土器底部 2	
		SA-060 支石墓			1			
		SA-064 支石墓			2			
		SA-065 支石墓			1		土製円盤 1	
		SA-066 支石墓			2			
		SA-067 支石墓			1			
		SA-068 支石墓			1			
		SA-069 支石墓			2		浅鉢 1、土器底部 1	
		SA-070 支石墓			1		土器底部 2	
		SA-071 支石墓			2			
		SA-072 支石墓					甕 2、高坏 1	
		SA-073 支石墓			1			
		SA-075 支石墓					土器底部 1	
		SA-085 支石墓			1		土器底部 1	
		SA-092 支石墓			1			
		SA-101 支石墓					甕 1、土器底部 2	

市町村名	遺 跡 名	遺 構 名	有柄式磨製石剣	有茎式磨製石鏃	壺	装身具	その他の出土遺物	文献
久保泉町	久保泉丸山遺跡	SA-105 支石墓					甕 1	50
		SA-106 支石墓					浅鉢 1、深鉢 1	
		SA-109 支石墓			1			
		SA-114 支石墓			3			
		SA-130 支石墓			1		大型鉢 1、土器底部 1、土製円盤 1	
		SJ-008 甕棺墓					浅鉢 1	
大和町	東山田一本杉遺跡Ⅰ区	SJ-019 甕棺墓				ガラス小玉 4		51
		SJ-052 甕棺墓				碧玉製管玉 1		
		SJ-072 甕棺墓				蛇紋岩製小玉 1、碧玉製管玉 2		
		SJ-075 甕棺墓					細形銅剣切先 1	
		SJ-078 甕棺墓				ガラス小玉 1		
		SP-38 土墳墓				碧玉製管玉 3		52
	礫石 A 遺跡	SJ-40 甕棺墓				碧玉製管玉 1		
		SP-46 石蓋土墳墓				孔雀石製勾玉 2		
		SP-48 石蓋土墳墓			1			
		SP-51 土墳墓				碧玉製管玉 3		
		SP-52 土墳墓				碧玉製管玉 4		
		SP-53 土墳墓			1			
		SP-54 土墳墓				土製勾玉 1		
		SP-56 土墳墓				碧玉製管玉 1		
	礫石 B 遺跡	SA-26 支石墓			1	碧玉製管玉 1		52
		SA-27 支石墓			1			
		SA-29 支石墓			2			
		SA-30 支石墓			1			
		SA-32 支石墓			1			
		SA-33 支石墓			4		鉢 1	
		SA-43 支石墓			1			
神崎町	四本黒木遺跡	1 号土墳墓		1				53
鳥栖市	永吉遺跡	土墳墓?	1		1			54
	安永田遺跡	287 号区 5T-3 号土墳墓					磨製石剣切先 2、磨製石鏃 1	55
中原町	香田遺跡	SX-010 支石墓			2		不明土製品 2	56

〈長崎県〉

市町村名	遺 跡 名	遺 構 名	有柄式磨製石剣	有茎式磨製石鏃	壺	装身具	その他の出土遺物	文献
豊玉町	住吉平 D 貝塚	石槨甕棺墓	1				銅剣 1	57
美津島町	白蓮江浦第一遺跡	4 号箱式石棺墓					縄文晩期土器片 1	58
	中道壇遺跡	1 号箱式石棺墓				碧玉製管玉 2		59
		4 号箱式石棺墓					挟溝茎式磨製石剣 1	
宇久町	宇久松原遺跡	10 号箱式石棺墓				碧玉製管玉 6		60
		5 号甕棺墓			1			
深掘町	深掘遺跡	2 号石蓋土墳墓			1			61
		6 号土墳墓					貝輪 7	
		9 号土墳墓					貝輪 3	
		13 号土墳墓					貝輪 2	
		14 号土墳墓					貝輪 10	
小値賀町	殿寺遺跡	15 号土墳墓					貝輪 5	62
	1 号石棺墓				1			
佐世保市	宮の本遺跡	3 号石棺墓				イモガイ製貝輪 4		63
		7 号石棺墓					磨り石 1	
		9 号石棺墓				二枚貝製貝輪		
		11 号石棺墓				二枚貝製貝輪	ハマグリ	
		12 号石棺墓					アワビ貝符、アワビ	
		13 号石棺墓					アワビ貝符、アワビ	
		14 号石棺墓					アワビ貝符	
		18 号石棺墓				マツバガイ製貝輪		
		2 号壺棺墓					アワビ貝製貝輪丁	
		5 号土墳墓				二枚貝製貝輪		
		6 号土墳墓				二枚貝製貝輪 3		
		12 号土墳墓					磨製石剣切先 1	
		14 号土墳墓				二枚貝製貝輪 2		
		18 号土墳墓				二枚貝製貝輪 3		

表7 文献一覧

- 1 宗像市教育委員会 1988『久原遺跡』宗像市文化財報告書第19集
- 2 福岡市教育委員会 1975『蒲田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集
- 3 a 福岡市教育委員会 1986『吉武高木』福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集
b 福岡市立歴史資料館 1986『早良王墓とその時代』福岡市立歴史資料館図録第11集
c 福岡市教育委員会 1996『吉武遺跡群Ⅷ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集
- 4 福岡市教育委員会 1986『藤崎遺跡Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集
- 5 森貞次郎 1968「飯倉の甕棺と細形銅剣」『有田遺跡』
- 6 森貞次郎 1968「有田甕棺遺跡の甕棺と銅戈」『有田遺跡』
- 7 福岡市教育委員会 1986『有田・小田部第6集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集
- 8 福岡県教育委員会 1925「福岡県地獄天神社の銅鉾銅剣」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書』第一集
- 9 福岡市教育委員会 1995『板付遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第410集
- 10 a 福岡市教育委員会 1970『金隈遺跡第一次調査概報』
b 福岡市教育委員会 1971『金隈遺跡第二次調査概報』
c 福岡市教育委員会 1985『史跡金隈遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集
- 11 福岡市教育委員会 1994『飯倉唐木遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第387集
- 12 福岡市教育委員会 1994『飯氏遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第390集
- 13 福岡市教育委員会 1996『下月隈天神森遺跡Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第457集
- 14 福岡市教育委員会 1996『周船寺遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第493集
- 15 福岡県教育委員会 1992『白峯遺跡』福岡県文化財調査報告書第95集
- 16 志免町教育委員会 1996『松ヶ上遺跡』志免町文化財調査報告書第6集
- 17 原田大六 1952「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」『考古学雑誌』第38巻第4
- 18 文化財保護委員会 1956『志登支石墓』
- 19 福岡県教育委員会 1980『三雲遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第58集
- 20 福岡県教育委員会 1981『三雲遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第60集
- 21 前原町教育委員会 1989『長野川流域の遺跡群』前原町文化財調査報告書第31集
- 22 福岡県教育委員会 1983『石崎曲り田遺跡Ⅰ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第8集
- 23 二丈町教育委員会 1995『大坪遺跡Ⅰ』二丈町文化財調査報告書第10集
- 24 志摩町教育委員会 1987『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書第7集
- 25 志摩町教育委員会 1988『新町遺跡Ⅱ』志摩町文化財調査報告書第8集
- 26 春日市教育委員会 1966『福岡県伯耆社遺跡調査概報』
- 27 春日市教育委員会 1980『須玖・岡本遺跡』春日市文化財調査報告書第7集
- 28 春日町教育委員会 1969『一の谷遺跡』
- 29 那珂川町教育委員会 1984『松木遺跡Ⅰ』那珂川町文化財調査報告書第11集
- 30 a 那珂川町教育委員会 1989『観音堂遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第20集
b 那珂川町教育委員会 1994『観音堂遺跡群Ⅱ』那珂川町文化財調査報告書第33集
- 31 福岡県教育委員会 1974『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ
- 32 福岡県教育委員会 1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXV
- 33 福岡県教育委員会 1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXIV
- 34 夜須町教育委員会 1997『大木遺跡』夜須町埋蔵文化財調査報告書第35集

- 35 久留米市教育委員会 1993『汐入遺跡』久留米市埋蔵文化財調査報告書第78集
- 36 大野町教育委員会 1971『中・寺尾遺跡』大野町の文化財第3集
- 37 大野城市教育委員会 1977『中・寺尾遺跡』大野城市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 38 大野城市教育委員会 1997『御陵前ノ椽遺跡』大野城市埋蔵文化財調査報告書第48集
- 39 小郡市教育委員会 1986『三国の鼻遺跡Ⅱ』小郡市埋蔵文化財調査報告書第31集
- 40 福岡県教育委員会 1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXX
- 41 a 福岡県教育委員会 1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XⅢ
b 橋口達也 1976「磨製石剣嵌入人骨について」『スダレ遺跡』
- 42 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1987『井手尾遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第56集
- 43 a 竹並遺跡調査会 1977『竹並遺跡』
b 竹並遺跡調査会 1979『竹並遺跡』
- 44 下稗田遺跡調査指導員会 1985『下稗田遺跡』
- 45 築城町教育委員会 1984『安永遺跡』築城町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 46 唐津湾周辺遺跡調査委員会 1982『末盧国』
- 47 呼子町郷土史研究会 1981『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書第1集
- 48 佐賀県教育委員会 1981『押川遺跡』佐賀県文化財調査報告書第60集
- 49 佐賀市教育委員会 1985『東千布遺跡』佐賀市文化財調査報告書第15集
- 50 a 佐賀県教育委員会 1983『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第6集
b 佐賀県教育委員会 1986『久保泉丸山遺跡』佐賀県文化財調査報告書第84集 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書⁽⁵⁾
- 51 a 佐賀県教育委員会 1984『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第7集
b 佐賀県教育委員会 1986『東山田一本杉遺跡』佐賀県文化財調査報告書第125集 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書⁽¹⁸⁾
- 52 a 佐賀県教育委員会 1981『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第5集
b 佐賀県教育委員会 1989『礫石遺跡』佐賀県文化財調査報告書第91集 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書⁽⁹⁾
- 53 a 新郷土刊行会 1977『四本黒木遺跡発掘調査報告書』
b 神埼町教育委員会 1980『四本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第6集
- 54 小田富士雄 1959「佐賀県田代発見の石剣と土器」『九州考古学』7・8
- 55 a 鳥栖市教育委員会 1982『安永田遺跡本調査第2年次概要報告書』鳥栖市文化報告書第15集
b 鳥栖市教育委員会 1983『安永田遺跡』鳥栖市文化財報告書第16集
- 56 佐賀県教育委員会 1981『香田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第57集 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書⁽²⁾
- 57 長崎県教育委員会 1975『対馬の遺跡』
- 58 長崎県教育委員会 1974『対馬』長崎県文化財調査報告書第17集
- 59 長崎県教育委員会 1988『中道壇遺跡』長崎県文化財調査報告書第90集
- 60 長崎県教育委員会 1983『長崎県埋蔵文化財調査集報』Ⅶ
- 61 佐世保市教育委員会 1980『深堀遺跡』
- 62 小値賀町教育委員会 1980『殿寺遺跡』小値賀町文化財調査報告書第3集
- 63 佐世保市教育委員会 1980『宮の本遺跡』

付 久原遺跡の弥生時代前期墳墓

1. はじめに

久原遺跡は宗像市の盆地地形のほぼ中央に位置し、東西に貫流する釣川左岸の支流高瀬川左岸の標高 20 ～ 30 m の丘陵上に各時代の墳墓が分布する。遺跡から高瀬川を挟んだ東側に広がる沖積地は弥生時代以来、宗像地域最大の肥沃な農業生産地となっている。所在地は宗像市大字久原・光岡・王丸にまたがり、大字久原 388 番地を代表地番とする。発掘調査は宗像市教育委員会が調査主体となって 1985 年 8 月 19 日に着手し、翌年 9 月に終了した。調査の結果、弥生時代前期前半～中世の鎌倉時代におよぶ一大墓地遺跡であることがわかった。このうち、Ⅱ区で検出した遺構は、弥生時代前期の甕棺墓 5 基、土壙墓・木棺墓 7 基、貯蔵穴 18 基、古墳時代中～後期の前方後円墳 1 基と円墳 21 基、小石室墓 3 基、鎌倉時代の湖州鏡を副葬した木棺墓 1 基である。ここでは、田久松ヶ浦遺跡の墳墓との連続性が認められる土壙・木棺墓について紹介しておきたい。

2. Ⅱ区土壙墓・木棺墓の調査記録

SK1 (第 14 図)

墓壙上部は削平を受けているが、主軸は丘陵の稜線に直交し、東西向きとなる。現状は不整隅丸長方形を呈し、墓壙上面で 224 × 65cm を測る。墓壙底の 3 ヲ所に板石が置かれており、棺台と考えられる。東側の板石は厚さ 10cm で、上面は他の 2 石より高く、頭部を意識したものであろうか。墓壙底の長さ 192cm、棺台の両端の長さ 170cm で、成人を伸展葬する空間を十分に有している。棺台の存在から木棺墓が推定できる。墓壙内から小壺 (026) が 1 点出土しているが調査の不備から出土状況を正確に把握できなかった。口縁部と底部を欠くが、肩部が張り、頸部との境に 2 条の沈線が巡る。調整は外面横方向のミガキ、内面は胴部に横方向のハケ目、頸部と胴部の境には指圧痕が残る。色調は暗赤褐色で焼成は良好である。現存する器高は 5.7cm、復元胴部最大径 13.2cm を測る。板付Ⅰ式の壺であろう。

SK2 (第 14 図)

墓壙上部は削平を受けているが、主軸は丘陵の稜線に直交し、東西向きとなる。現状は不整長楕円形を呈し、墓壙上面で 195 × 40cm を測る。墓壙底の長さ 161cm で、成人を伸展葬する空間を十分に有している。出土遺物はない。

SK3 (第 14 図)

墓壙上半は削平を受けているが、主軸は丘陵の稜線に直交し、東西向きとなる。現状は整った長方形を呈し、墓壙上面で 200 × 61cm を測る。墓壙底西側に板石が 2 個並べて置かれており、

棺台と考えられる。厚さ 8cm である。中央と東側は石を欠いているが、削平により、失われたものと考えられる。墓壇底の長さ 189cm、棺台の配置を復元した両端の長さ 160cm で、成人を伸展葬する空間を十分に有している。棺台の存在から木棺墓が推定できる。出土遺物はない。

SK5 (第 14 図)

墓壇上半と西側短側壁を 18 号墳の地山整形時に失っている。主軸は丘陵の稜線に平行し、南北に近い向きとなる。現状は整った隅丸長方形を呈し、墓壇上面で $225 \alpha \times 87 \text{ cm}$ を測る。南側短側壁に近いところから小壺の完形品が出土し、墓壇底から約 30cm 浮いた所にあつて、正立の状態からやや中央側に傾いている。底部は円盤貼付で、体部は最大径が上半に位置する扁球形を呈する。肩部は張り、頸部との境に 3 条の沈線が巡る。頸部は内傾して、やや湾曲気味に立ち上げる。口縁部は短く外反し、下端に弱い段をつくる。口縁端部は隅丸の「コ」字形となる。体部上半に 3 条を 1 単位とする重弧文を 11 回連続させ、頸部に 3 条を 1 単位とする縦平行線文を 4 ヲ所描く。体部外表は横方向のヘラ研磨、頸部は右上がりのヘラ研磨。内面は指圧痕が残る。色調は黒褐色で、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。器高 16.1cm、口縁部径 10cm、体部最大径 15.8cm を測る。板付 I 式である。

SK6 (第 14 図)

群中では残りが良く、SK5 の西側に並列する。現状は不整の長方形を呈し、墓壇上面で $192 \times 88 \text{ cm}$ を測る。墓壇底の長さ 159cm で、成人を伸展葬する空間を十分に有している。出土遺物はない。

SK7 (第 14 図)

墓壇上半は削平を受けているが、SK1 の南側 2.5 m にあつて主軸を同じくする。現状は隅丸長方形を呈し、墓壇上面で $275 \times 99 \text{ cm}$ を測る。墓壇底中央に板石が 1 個置かれており、棺台と考えられる。厚さ 6cm ほどである。東西の石を欠いており、当初からなかったものと考えられる。墓壇底の長さ 260cm で、成人を伸展葬する空間を十分に有している。棺台の存在から木棺墓が推定できる。出土遺物はない。

SK8 (第 14 図)

最南部にあつて単独で占地する。墓壇上半と東側短側壁を小石室の地山整形時に失っている。主軸は丘陵の稜線に直交し、南北向きとなる。現状は整った長方形を呈し、墓壇上面で $202 \alpha \times 75 \text{ cm}$ を測る。墓壇中央の北長側壁側から磨製石剣が出土した。墓壇底からやや浮いており、切先は東を向いている。磨製石剣の切先から東に 30cm の墓壇中央に、床から 10cm 浮いて磨製石鏃が 4 点出土した。切先の向きは調査の不備から正確に押さえることができなかった。墓壇中に浮いて出土したことを根拠に木棺の存在と棺外の棺上に置かれたものと推定することもできる。

磨製石剣は有柄式に属するもので、長さ 26.2cm の完形品で身部に研ぎ減りが認められる。有柄式のなかでは無段のもので、下條分類に従うと柄の上端から把頭に向かって $2/3$ ほどが平行に走り、直線的となる。その下半で大きく広がる。柄の幅は剣身の幅より狭い。柄の中央には

鎬を有しない。柄の断面は紡錘形で、握りに適している形態は分類のⅠ式の中でも a・b 様式を共有し、段の有無を除くとより古式の様相をみせ、Ⅰ a とⅠ b の折衷形式といえる。身の扁平感や柄の幅が身より狭いことから、田久松ヶ浦 SK 206 出土例より後出するものと思われる。

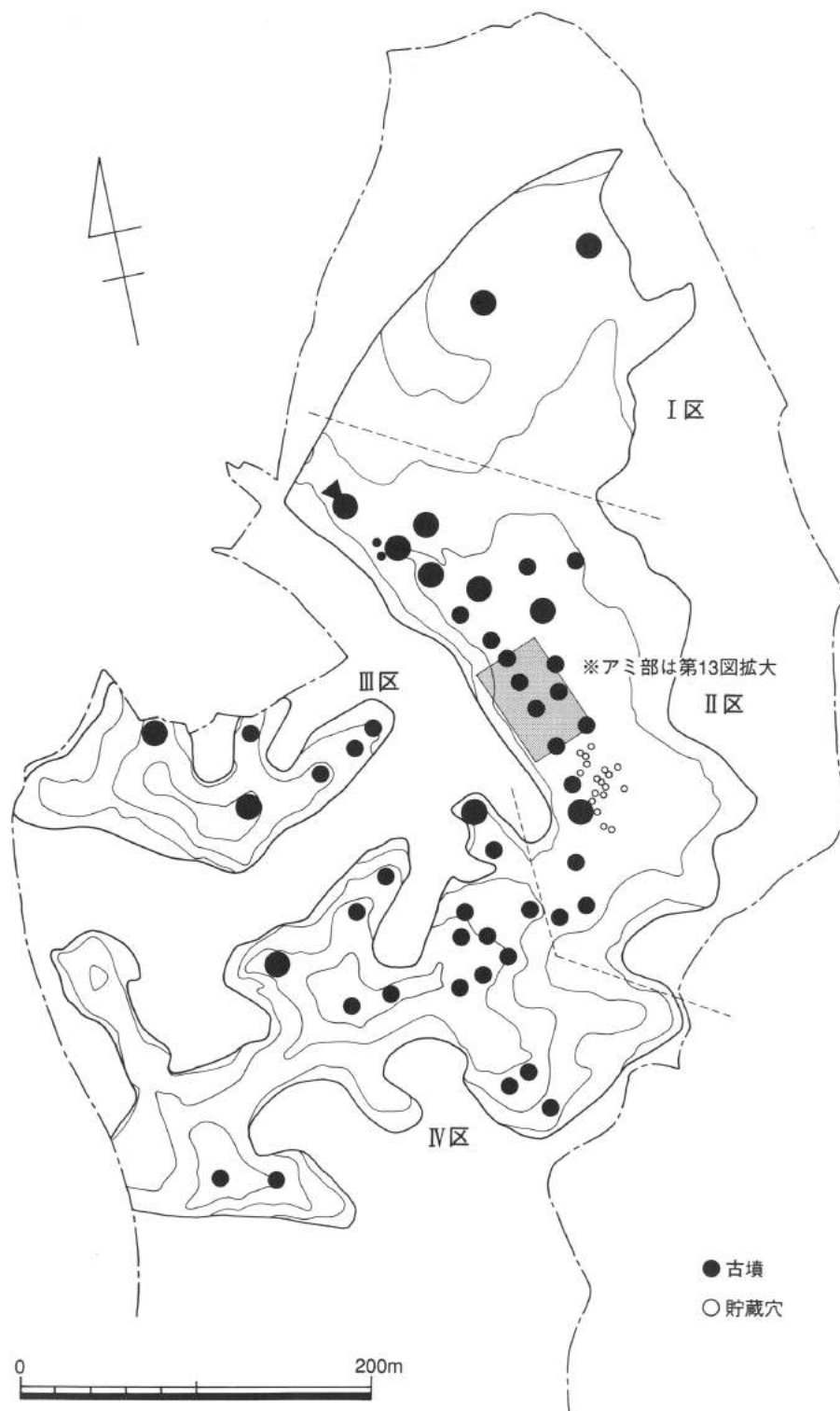
磨製石鏃是有茎式柳葉形磨製石鏃と呼ばれる形式で、いずれも下條分類の AⅠ a に属し、全長 9.2 ～ 10.8cm の範囲にあり、茎長は 2.3 ～ 3.4cm、刃部は関部から切先まで直線的となる。身の中央には鎬がとおる茎まで及ぶ。身の厚さは 0.5 ～ 0.6cm となる。関は身に対し水平に近く鋭い。茎の断面は扁六角形となる。重さは 5.0 ～ 7.0 g である。

3. まとめ

弥生時代前期に属する 12 基の墳墓は、列埋葬ないし 2 基が並列する特徴を有し、田久松ヶ浦遺跡と同様の遺構配置が認められた。墳墓の向きや配置から 4 群に分けられる。第一群はⅡ区 14 号墳の墳丘下で検出した小児用とされる 5 基の甕棺墓 (ST1 ～ 5) で、この時期の墓地では北側の一群を占める。第二群はⅡ区 14 号墳の南側墳裾から 16 号墳の東側墳裾までの約 12 m の範囲に列に並ぶ 4 基の土壙・木棺墓 (SK1 ～ 3・7)、第三群はⅡ区 18 号墳の墳丘下に築かれた 2 基の土壙・木棺墓 (SK5・6)、第四群はⅡ-20 号墳の東に単独で築かれた土壙・木棺墓 (SK8) となる。第二群～四群の 7 基が成人の墓で、第一群の甕棺墓 5 基が小児の墓とすることができ、田久松ヶ浦遺跡の成人主体の墳墓とは異なり、本遺跡の墳墓集団が成人と小児から構成されていることが分かる。

土壙・木棺墓には 3 基の墳墓に棺台が存在することから木棺を想定しておきたい。また、他の遺構についても木棺を有する空間を十分に墓壙内に持っており、木棺の存在を考えておきたい。木棺をのせる棺台については、田久松ヶ浦遺跡 SK218 の墓壙底に棺台石があることや、時期的近似性から、両遺跡の墳墓には連続性が考えられよう。

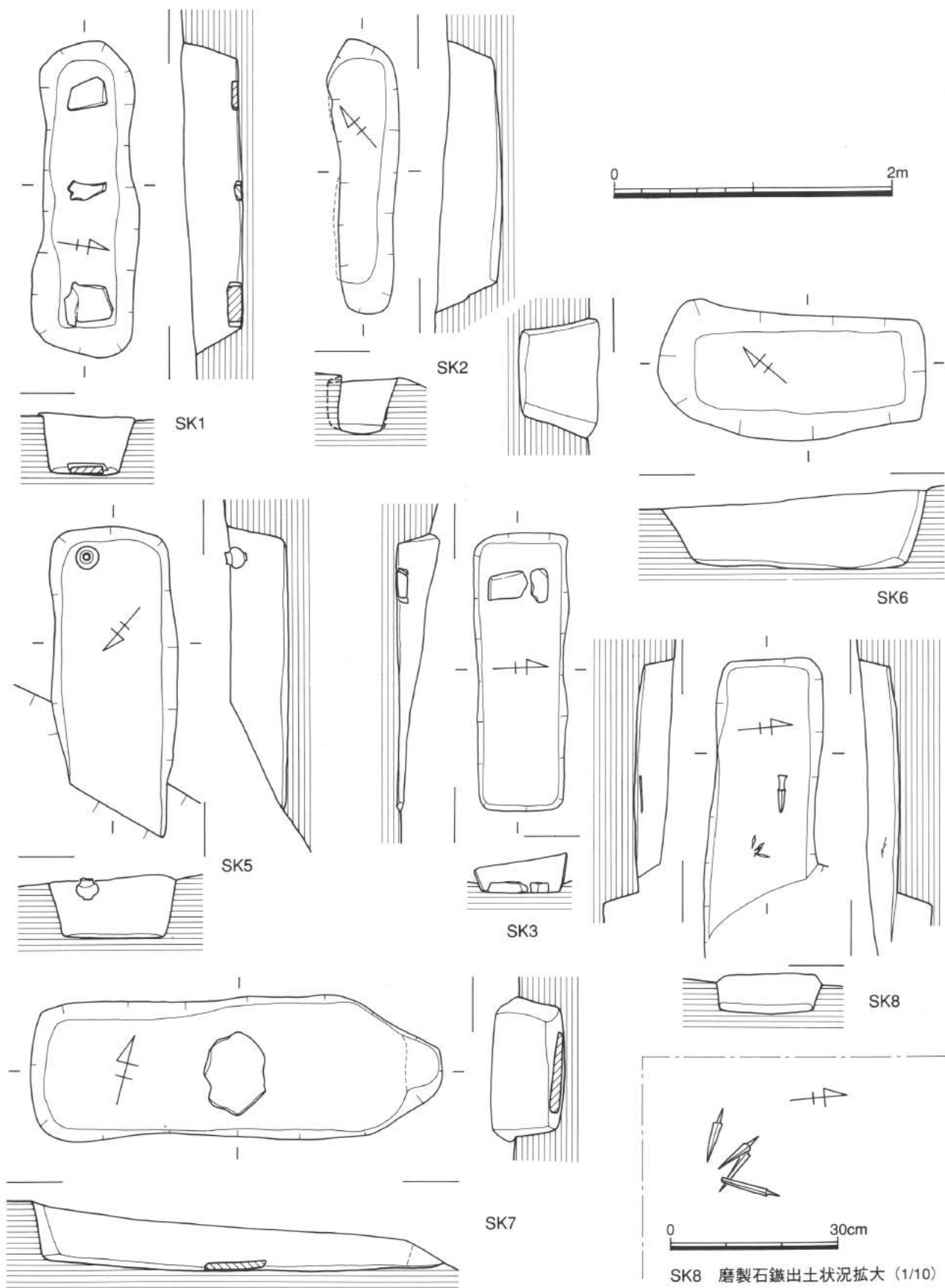
SK1・5 の小壺、SK8 の磨製石剣、5 基の甕棺墓の資料から本遺跡の弥生時代前期墳墓は板付Ⅰ(新)式から板付Ⅱ a 式の時期にかけて営まれたものと考えられる。



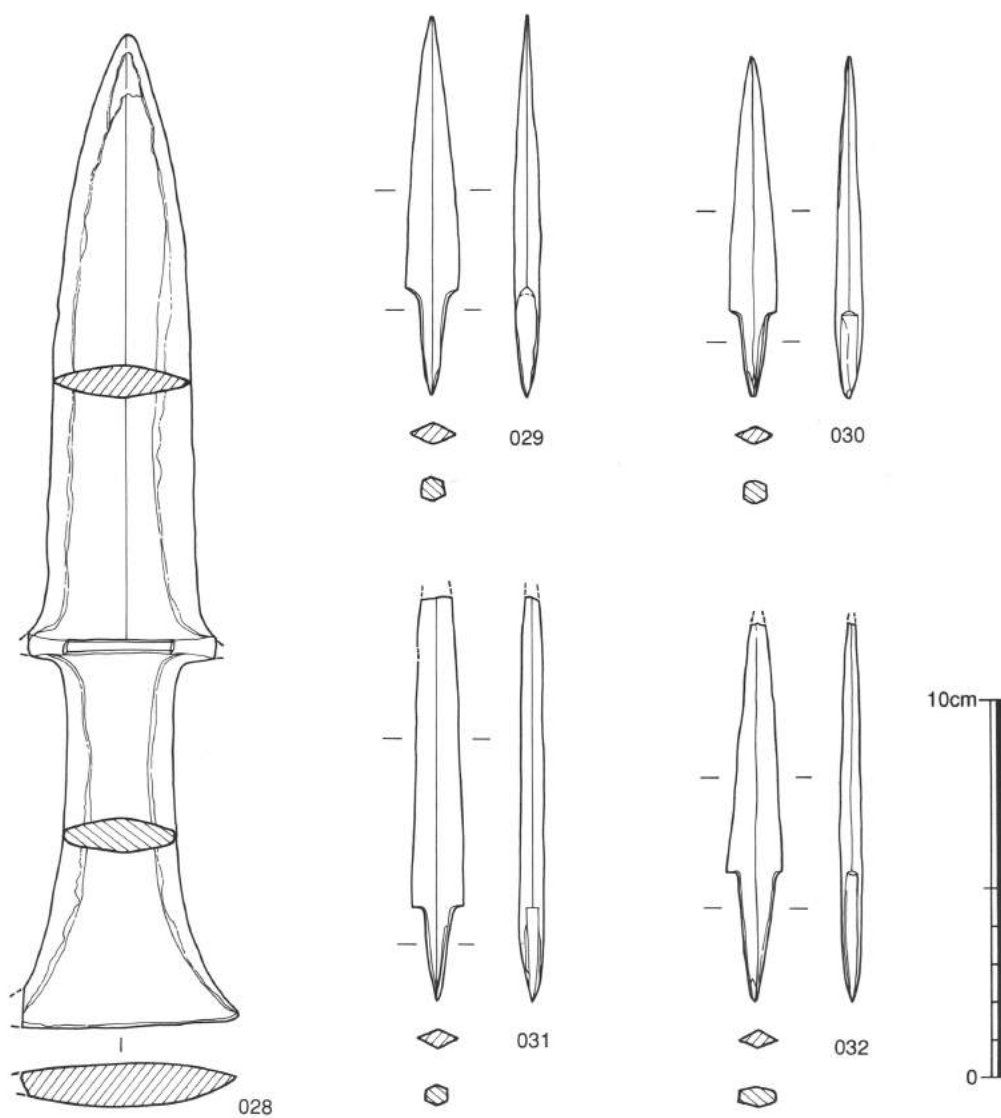
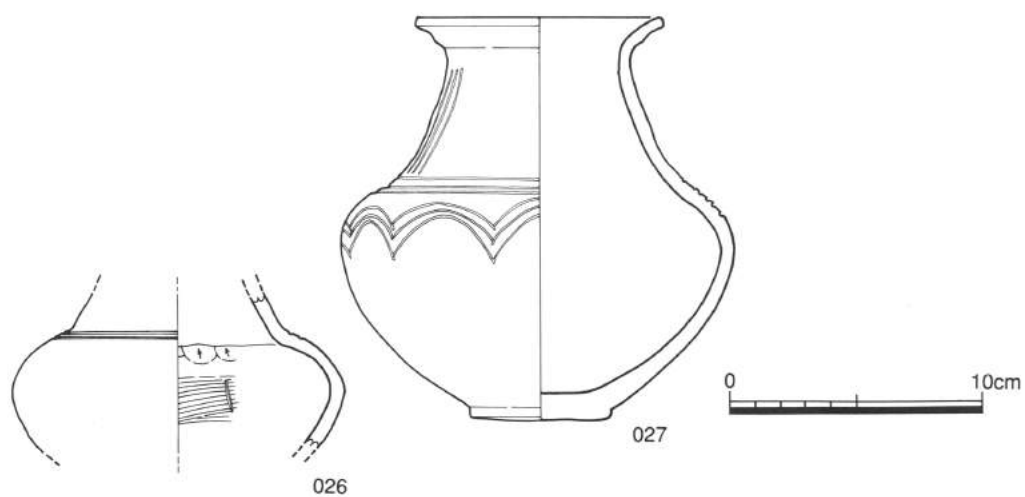
第 12 図 久原遺跡全体図 (1/4,000)



第 13 図 久原遺跡Ⅱ区弥生墳墓周辺の遺構配置図 (1/300)



第14図 久原遺跡Ⅱ区 SK1～3・5～8 遺構実測図 (1/40・1/10)



第 15 図 久原遺跡 SK1・5・8 出土遺物実測図 (土器 1/3・石器 1/2)

表 8 久原遺跡弥生前期土壇墓・木棺墓・甕棺墓一覧表

※単位：m、（）は復元値

番号	遺構番号	調査区	主軸方位	埋葬壇	構 造	埋葬壇の規模			埋葬壇床面規模		出 土 遺 物	備 考
						長軸	短軸	深さ	長軸	短軸		
1	SK-1	Ⅱ区	N-81° -W	不整隅丸長方形	木棺墓	2.24	0.65	0.38	1.92	0.47	壺 1	棺台あり
2	SK-2	Ⅱ区	N-40° -W	長楕円形	土壇墓	1.95	0.40	0.42	1.61	0.28		
3	SK-3	Ⅱ区	N-88° -W	長方形	木棺墓	2.00	0.61	0.16	1.89	0.50		床面中央に平石 1 個
4	SK-5	Ⅱ区	N-41° -W	(隅丸長方形)	木棺墓	2.25 α	0.87	0.42	2.15 α	0.71	墓壇内の棺外に壺 1	
5	SK-6	Ⅱ区	N-41° -W	不整長方形	木棺墓	1.92	0.88	0.52	1.50	0.59		
6	SK-7	Ⅱ区	N-76° -E	隅丸長方形	木棺墓	(2.75)	0.99	0.30	(2.60)	0.87		棺台あり
7	SK-8	Ⅱ区	N-85° -W	(長方形)	木棺墓	2.02 α	0.75	0.24	1.98 α	0.66	有柄式磨製石剣 1 有茎式磨製石鏃 4	石鏃の切先欠損は調査時か
番号	遺構番号	調査区	主軸方位	構 造	上 棺	下 棺	埋置角度	備 考				
8	ST1	Ⅱ区	N-60° -W	合口・覆口	口縁打欠	壺 口縁打欠き	28°					
9	ST2	Ⅱ区	N-81° -W	合口・覆口		口縁打欠き	15°					
10	ST3	Ⅱ区	N-81° -W	合口・覆口	口縁打欠	壺 口縁打欠き	25°					
11	ST4	Ⅱ区	N-52° -W	合口・覆口	鉢口縁打欠	壺 口縁打欠き	26°					
12	ST5	Ⅱ区		合口・覆口								

表 9 久原遺跡弥生前期出土遺物一覧表

※単位：m、数値は現存値、（）は復元値

遺物番号	遺 物 名	遺構番号	調査区	口径	器高	体 部 最大径	底部径	備 考				
026	壺	SK-1	Ⅱ区			13.2		頸部と胴部境に横沈線 2 条				
027	壺	SK-5	Ⅱ区	(10.0)	16.1	15.8	5.6	胴部に 3 条連弧紋 11 連弧文				
遺物番号	遺 物 名	遺構番号	調査区	全長	身長	最大身幅	最大身厚	柄長	柄幅	鏑長	鏑幅	備 考
028	有柄式磨製石剣	SK-8	Ⅱ区	26.20	15.7	4.00	0.90	9.50	5.3 α	1.00	5.00	柄括れ 2.9、重さ 145.9 g
遺物番号	遺 物 名	遺構番号	調査区	長さ	幅	身部 最大厚	重さ	茎長	石材			備 考
032	有茎式磨製石鏃	SK-8	Ⅱ区	10.10	1.40	0.50	5.80	3.40	粘板岩			切先調査時欠損
031	有茎式磨製石鏃		Ⅱ区	10.80	1.30	0.60	7.00	2.50	粘板岩			切先調査時欠損
030	有茎式磨製石鏃		Ⅱ区	9.20	1.20	0.50	5.00	2.30	粘板岩			
029	有茎式磨製石鏃		Ⅱ区	10.20	1.50	0.60	5.50	2.90	粘板岩			
	有茎式磨製石鏃	SK-1 周辺採集	Ⅱ区	12.80	1.50	0.80	12.00	3.20	粘板岩			茎まで鏑が通り、身断面菱形、茎断面六角形

圖 版



(1) 田久松ヶ浦遺跡周辺の航空写真（1/12,500）昭和53年6月撮影

図版 2



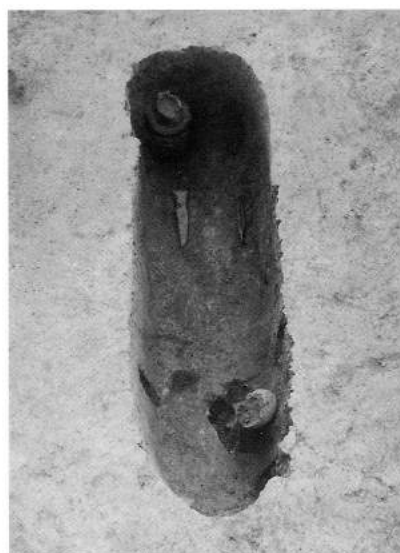
(1) C区全景（東から）



(2) B・C区全景（東から）



(3) A区全景（北から）



(1) SK201 (西から)



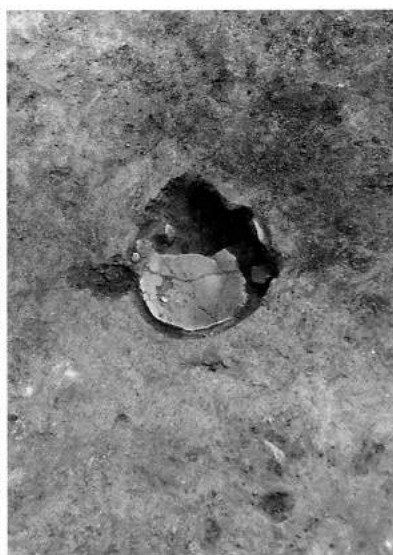
(2) SK201・遺物出土状況
(西から)



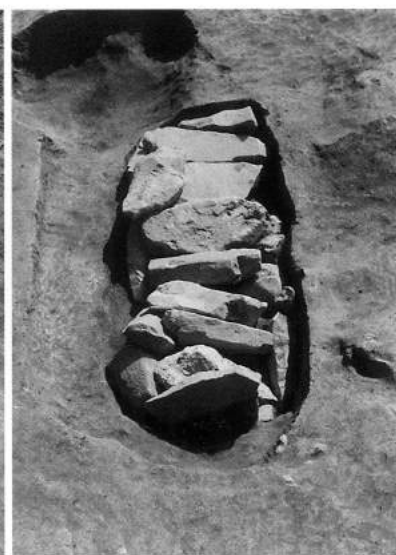
(3) SK203 (北から)



(4) SK203・完掘後 (北から)



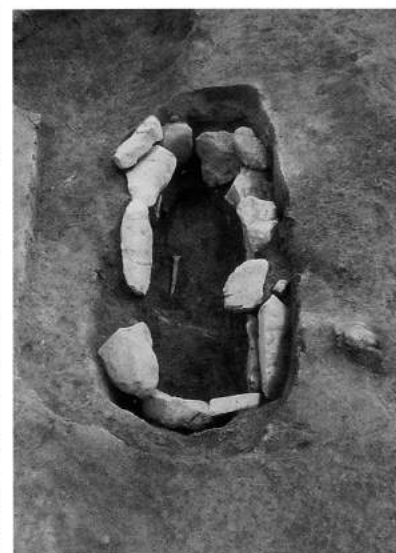
(5) ST204 (西から)



(6) SK206・石蓋検出 (西から)



(7) SK206・石蓋西側 (北から)



(8) SK206・遺物出土状況
(西から)

図版 4



(1) SK206・有柄式磨製石剣出土状況（南から）

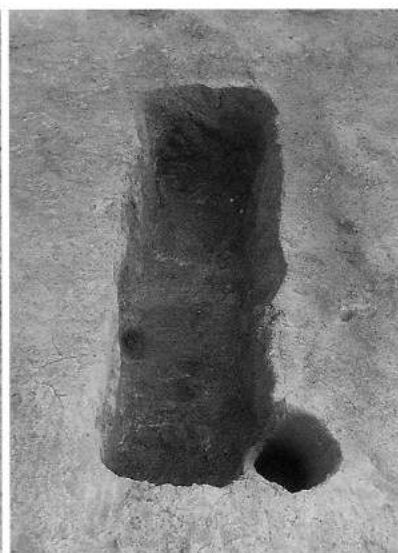
(2) SK206・有柄式磨製石剣出土状況（北から）



(3) SK206・完掘後（西から）

(4) SK207（西から）

(5) SK208（西から）



(6) SK209（北から）

(7) SK210（西から）

(8) SK210・完掘後（西から）



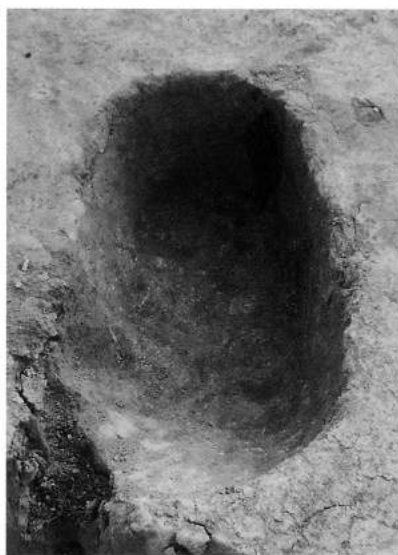
(1) SK211 (西から)



(2) SK211・完掘後 (西から)



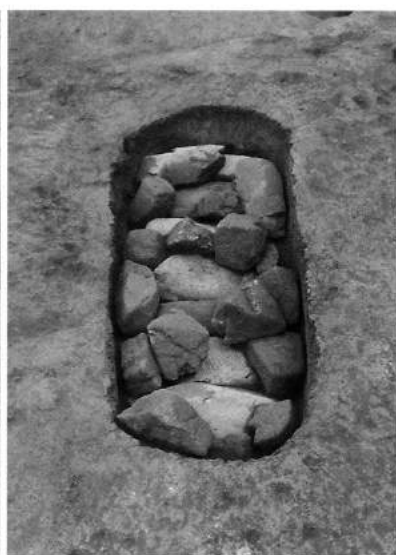
(3) SK215 (西から)



(4) SK216 (北から)



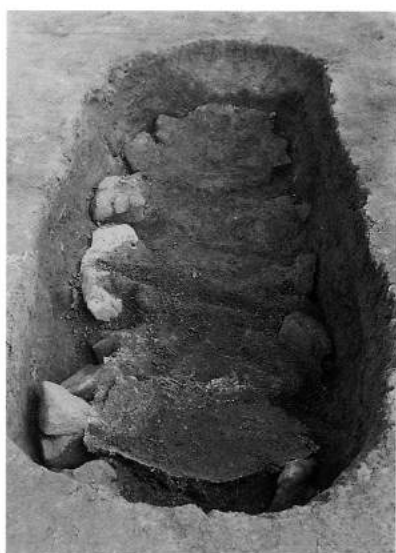
(5) ST217 (西から)



(6) SK218・石蓋検出 (西から)



(7) SK218・石蓋取り上げ途中 (北から)



(8) SK218・石蓋除去直後
(西から)



(1) SK218・埋土除去後
(西から)



(2) SK218・転石除去後
(西から)



(3) SK218・棺台検出 (東から)



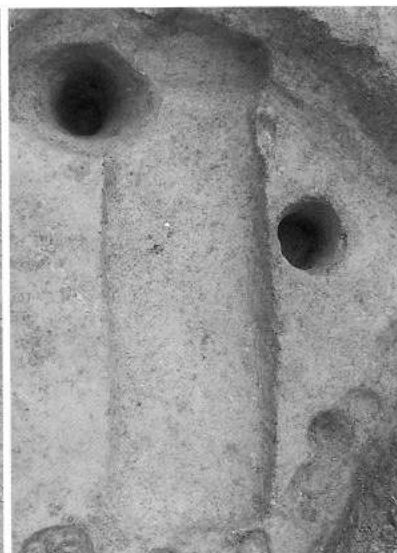
(4) SK218 完掘後 (西から)



(5) SK218・壺出土状況 (南から)

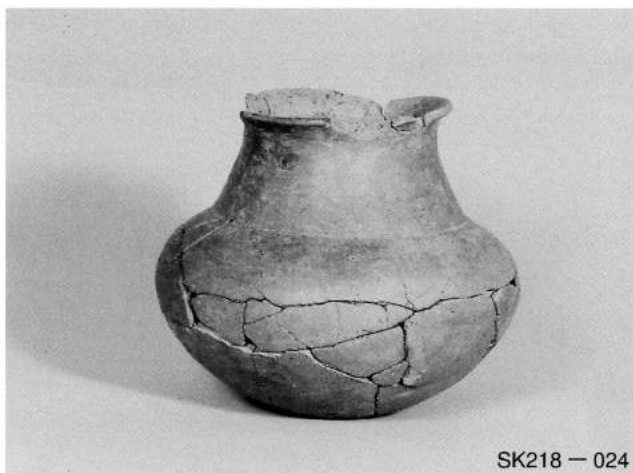


(6) SK226 (西から)



(7) SK230 (西から)

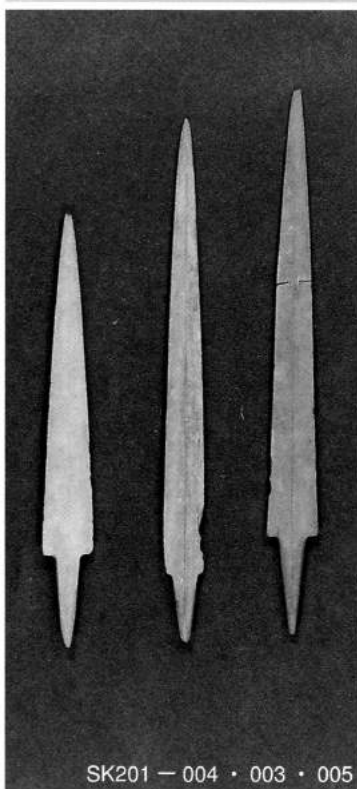




SK218 — 024



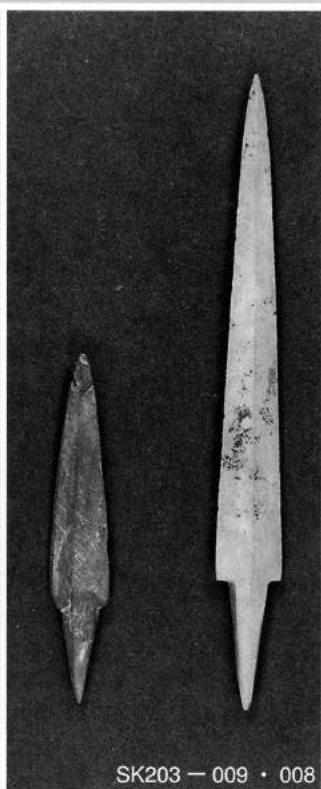
SK226 — 025



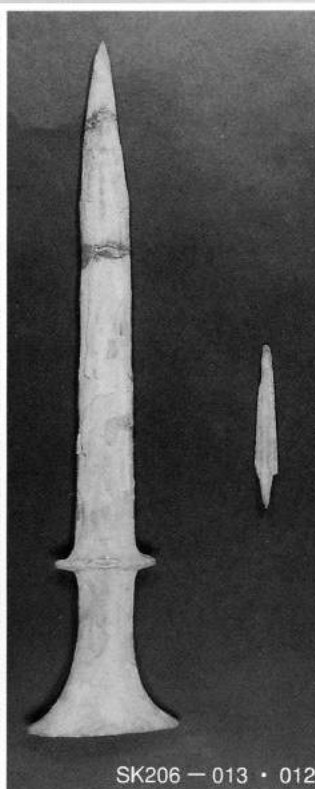
SK201 — 004 · 003 · 005



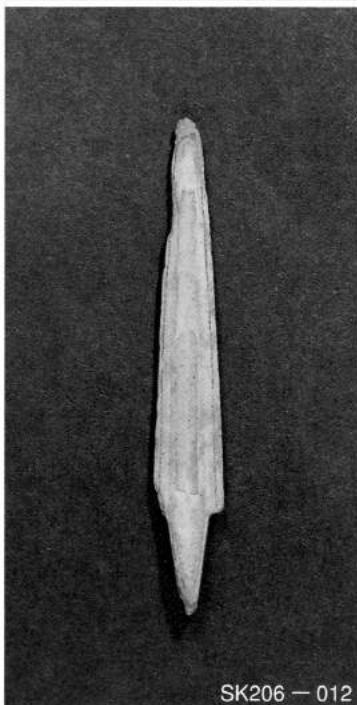
SK201 — 006



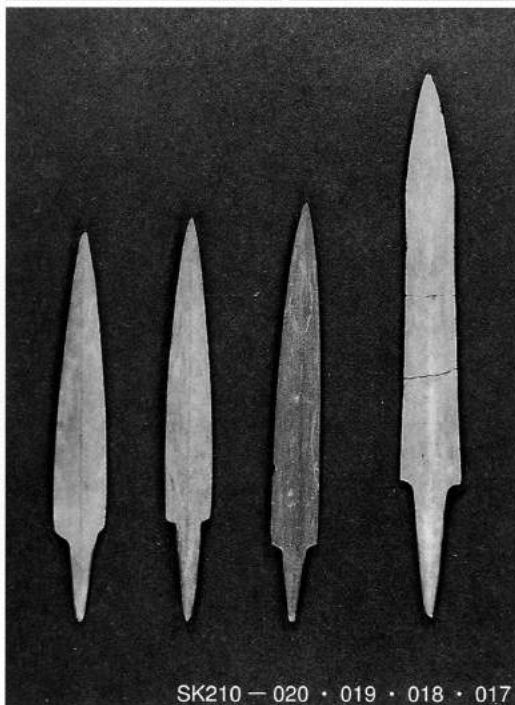
SK203 — 009 · 008



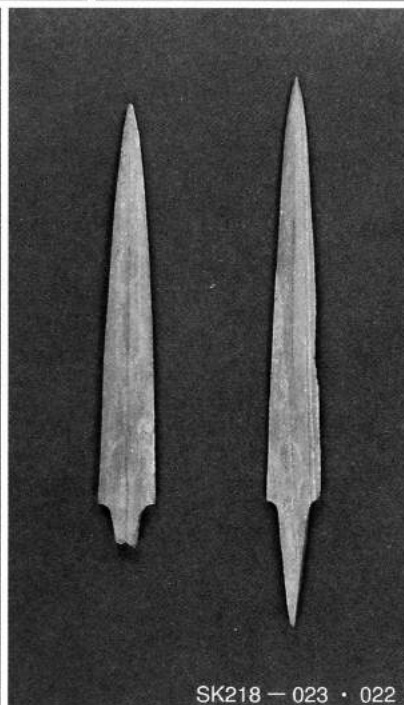
SK206 — 013 · 012



SK206 — 012



SK210 — 020 · 019 · 018 · 017



SK218 — 023 · 022

報 告 書 抄 録

フリガナ	タクマツガウラ							
書 名	田久松ヶ浦							
副 書 名	福岡県宗像市田久所在遺跡の発掘調査報告							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	宗像市文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第 47 集							
編 著 者 名	原俊一・白木英敏・秋成雅博							
編 集 機 関	宗像市教育委員会							
所 在 地	〒 811 - 3492 福岡県宗像市大字東郷 995 番地 TEL (0940) 36 - 1540							
発 行 年 月 日	西暦 1999 年 3 月 31 日							
フリガナ 所 収 遺 跡	フリガナ 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
タクマツガウラ	ムナカタシオキアザタ 宗像市大字田久 1172-1 外	40220	330801	33° 47' 58"	130° 33' 47"	1998.7.17 ~ 1998.11.6	3,250㎡	宅地造成
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
田 久 松 ヶ 浦	墳 墓	弥 生	土墳墓 木棺墓 甕棺墓		壺 有柄式磨製石剣 有茎式磨製石鏃		石槨墓 弥生墳墓のみの報告	

田 久 松 ヶ 浦

宗像市文化財報告書

第 47 集

平成 11 年 3 月 31 日

発 行 宗像市教育委員会

宗像市大字東郷 995 番地

印 刷 (有)青雲印刷

北九州市小倉北区熊谷 4-1-1